長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第11集

出島和蘭商館跡

一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

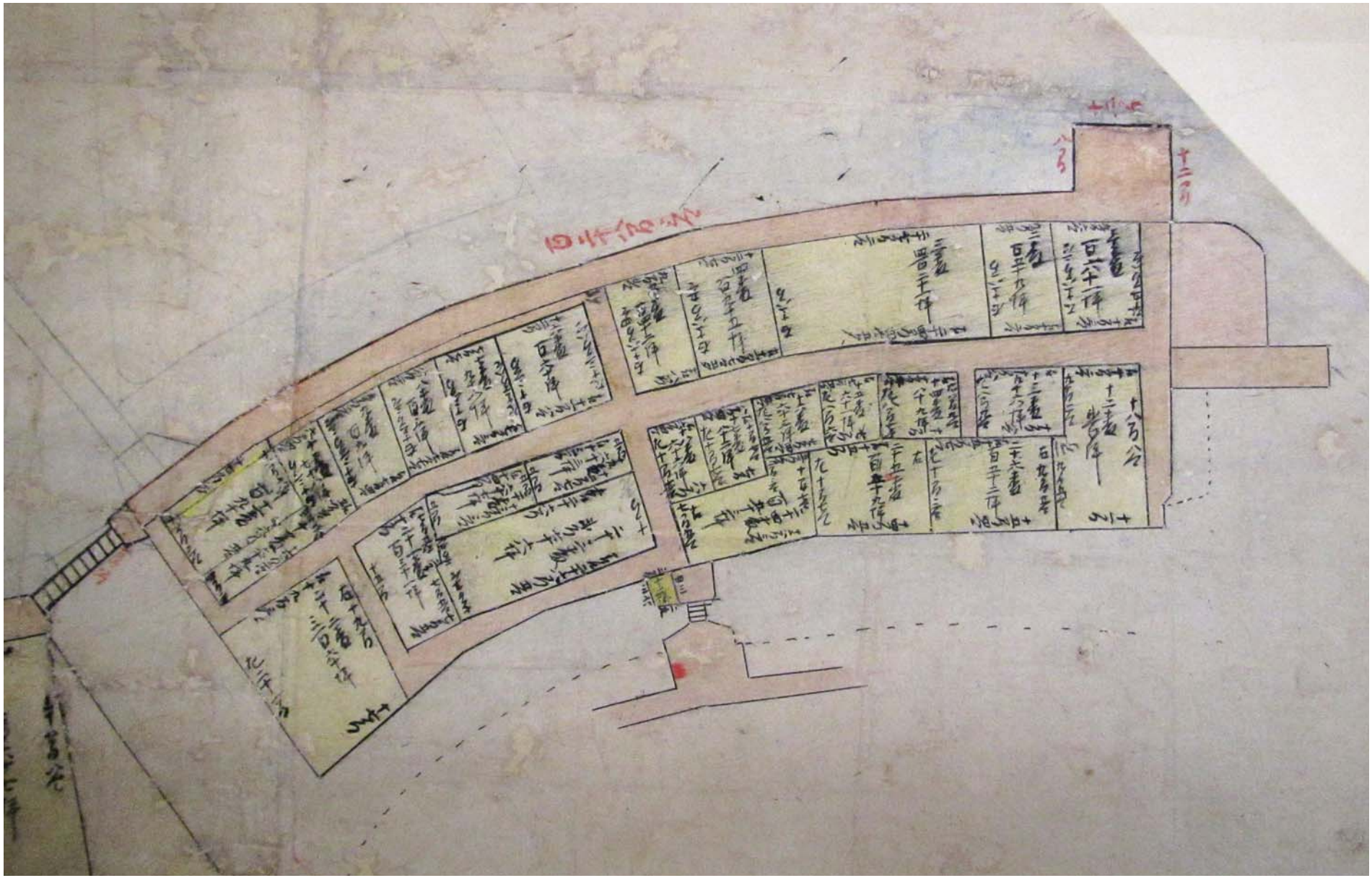
２０１４

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第11集

出島和蘭商館跡

一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



長崎居留地地割図（明治２年作成）

長崎歴史文化博物館蔵

序

長崎の港はキリシタン大名の大村純忠によって、ポルトガル貿易を目的に元亀２年（1571）に貿易港として開港されています。その後、寛永13年（1636）長崎の町人によって出島が築かれ完成します。江戸幕府は、平戸和蘭商館に対し寛永18年（1641）に長崎の出島への移転命令を下し、これにより、長崎は西洋との唯一の窓口として地位を確立していきました。

時代は、安政元年（1854）となり、日米・日英・日露及び日蘭（1855年）の和親条約の調印により開国の第一歩が始まり、これに併せて、出島周辺の埋め立てが行なわれ扇形の形状は次第に失われていきます。

本報告書は、一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う発掘調査によって検出された元治元年（1864）築造の築足石垣、及び埋め立てた土に混じり出島で使用され廃棄されたと見られる輸入陶器や国産陶磁器等の資料を収録しています。

本書が文化財保護や地域の歴史を知るうえで、活用して頂ければ幸いに存じます。

平成26年３月14日

長崎県教育委員会教育長

渡　辺　敏　則

例　　言

1　本書は、一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
調査は、長崎県教育委員会が長崎県長崎振興局建設部道路維持課の依頼を受け、平成24年度に実施した。

2　報告する遺跡及び調査期間・担当者は下記のとおりである。
（1）出島和蘭商館跡：長崎県長崎市出島町・江戸町
（2）調査は、長崎県埋蔵文化財センターが担当し、発掘調査を株式会社イビソクに業務委託して実施した。
（3）出島和蘭商館跡の発掘調査期間及び調査面積
平成24年11月19日～平成24年12月７日に22㎡の発掘調査を実施した。
平成25年２月４日～平成25年２月７日に32㎡の立会調査を実施した。
（4）調査担当者

長崎県埋蔵文化財センター	調査課長	川道　寛（現東アジア考古学研究室長）
	調査課係長	町田　利幸（現調査課長）
株式会社イビソク	九州支店長	近藤　真人
株式会社イビソク	文化財調査部	清水　輔
株式会社イビソク	技術部	香山　周亮

3　調査時の写真撮影及び遺構実測は（株）イビソクが担当し、陶磁器製品、ガラス製品の遺物実測は（株）大信技術開発が担当した。

4　本書の執筆は、Ⅲ-５のガラス製品・クレーパイプを文化財調査員の前田加美が担当し、それ以外を町田が担当した。また、長崎市内地形分類図については埋蔵文化財センター白石渓冴文化財保護主事に作成を依頼した。

5　現地調査の環境整備については、折田建設工業株式会社に協力いただいた。

6　本書の編集は町田が行った。

7　本書関係の出土遺物、図面、写真類は、現在長崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

Ⅰ　本調査に至る経緯
1．事業計画の確認……1
2．事業に対する調査計画……1
3．発掘調査……2

Ⅱ　地理的歴史的環境
1．地理的環境……2
2．長崎開港……6
3．出島の埋立て……6

Ⅲ　調査
1．調査概要……6
2．土　　層……8
3．遺　　構……8
4．遺　　物……9
5．ま と め……25

Ⅳ　立会調査
1．調査概要……28
2．調査結果……28

挿 図 目 次

第１図　本調査・立会調査配置図……3
第２図　長崎市内地形分類図……5
第３図　出島和蘭商館跡位置図……7
第４図　調査区配置図……8
第５図　土層……9
第６図　石組遺構……9
第７図　石垣遺構……10
第８図　①碗類……11
第９図　②皿類……12
第10図　③皿類……13
第11図　④鉢類……15
第12図　⑤碗類……16
第13図　⑥碗・皿・甕類……16
第14図　⑦碗・蓋・皿類……17
第15図　⑧壺・鉢類……18
第16図　⑨西洋陶器類……19
第17図　⑩煉瓦類……21
第18図　⑪煉瓦類……22
第19図　⑫煉瓦類……23
第20図　⑬瓦類……24
第21図　⑭ガラス類……25
第22図　⑮クレーパイプ類……25

図 版 目 次

図版１　本調査（①・②）・立会調査（③）……31　　図版２　本調査（土層・石組・石垣）……32
長崎居留地地割図（明治２年作成）長崎歴史文化博物館蔵……巻頭カラー

表　目　次

煉瓦等計測表①・瓦計測表②・クレーパイプ計測表③……29

Ⅰ　本調査に至る経緯

1．事業計画の確認（第１図）

平成24年３月に一般国道499号線電線共同溝整備工事に係る出島和蘭商館跡の取扱についての打合せを行なった。以下に打ち合わせ内容を記す。

・平成16年度に実施した事業の延伸工事で、平成24年度に工事を実施する。事業計画場所は、一般国道499号線内である。工事は交通量の減少する夜間に実施し、掘削部分は覆鋼板を敷き昼間は交通機関が利用できるような工事とする。

・埋蔵文化財の調査においても工事工程の流れでの調査を行なわざるを得ない。また、掘削深度が2.5ｍになり満潮、干潮によって調査の日程を合わせる必要が生じる。

・電線の地中化を行なう事業で、道路を横断する部分は、主に幅1.5m、深さ2.5mの掘削を行なう計画としている。この地域の工事着手は10月頃を予定している。

・出島本体に近い部分は計画地を少しずらして調査を回避できないか。国道部分については、以前の調査で遺構を確認しており調査が必要と考えている。ただ、過去の調査を踏まえて、最小限度の調査にしたい。

・長崎振興局としては、工事中不時に遺構が確認され工事が中断することが無いようにしたい。このため、ある程度予想されるところについては調査を実施してほしい。

・調査については、埋蔵文化財センターが対応し、調査員は壱岐から来る。なるべく調査期間を短期間におさえたい。

・今後も工事計画の進展状況で協議を進めていきたい。

・平成24年３月14日㈬一般国道499号線電線共同溝整備工事に係る埋蔵文化財の取扱打合せ出席者。

長崎県長崎振興局道路維持課	係長	松尾　貴志
長崎県長崎振興局道路維持課	主任技師	松尾　智弘
長崎県長崎振興局道路維持課	技師	三山　武矢
長崎県埋蔵文化財センター	課長	川道　　寛
長崎県学芸文化課	係長	寺田　正剛

2．事業に対する調査計画

・調査の日程を11月12日から予定し、調査面積22㎡を実施する。作業員、ユニットハウス、調査機材は長崎振興局で対応する。調査は発掘会社に委託し長崎県埋蔵文化財センターから発掘調査の指示を行なう。実際の調査は平成24年11月19日～平成24年12月７日に実施した。

・調査は、アスファルトと砂利砕石の部分は、工事立会いでバックホーによる掘削作業を行なう。バックホー掘削後に電線共同溝整備工事の掘削ラインを確定する。

・人力掘削で、文久元年の石垣と元治元年の石垣検出を行なう。路面電車の軌道敷内工事は、想定した石垣が検出されない箇所での掘削とする。調査実施を午後10時から午前６時までの時間帯で行なう。

・平成24年10月17日㈬一般国道499号線電線共同溝整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査実施の打合せ出席者。

長崎県長崎振興局道路維持課	主任技師	犬束　智志
長崎県埋蔵文化財センター	課長	川道　　寛
長崎県埋蔵文化財センター	係長	町田　利幸
長崎県学芸文化課	係長	寺田　正剛
折田建設工業株式会社	工事部	牛津　浩樹

3．発掘調査

・平成24年11月19日～平成24年12月７日の間に一般国道499号電線共同溝整備工事に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施する。

・調査面積は22㎡

・出島和蘭商館跡の調査関係者

長崎県埋蔵文化財センター	課長	川道　　寛（現東アジア考古学研究室長）
	係長	町田　利幸（現調査課長）
長崎県長崎振興局建設部道路維持課	主任技師	犬束　智志
折田建設工業株式会社	工事部	牛津　浩樹
株式会社イビソク	九州支店営業部長	稲田　昌和
株式会社イビソク	九州支店支店長	近藤　真人
株式会社イビソク	九州支店文化財調査部	清水　　輔
株式会社イビソク	九州支店技術部	香山　周亮

Ⅱ　地理的歴史的環境

1．地理的環境（第２図）

・地形分類[註1]

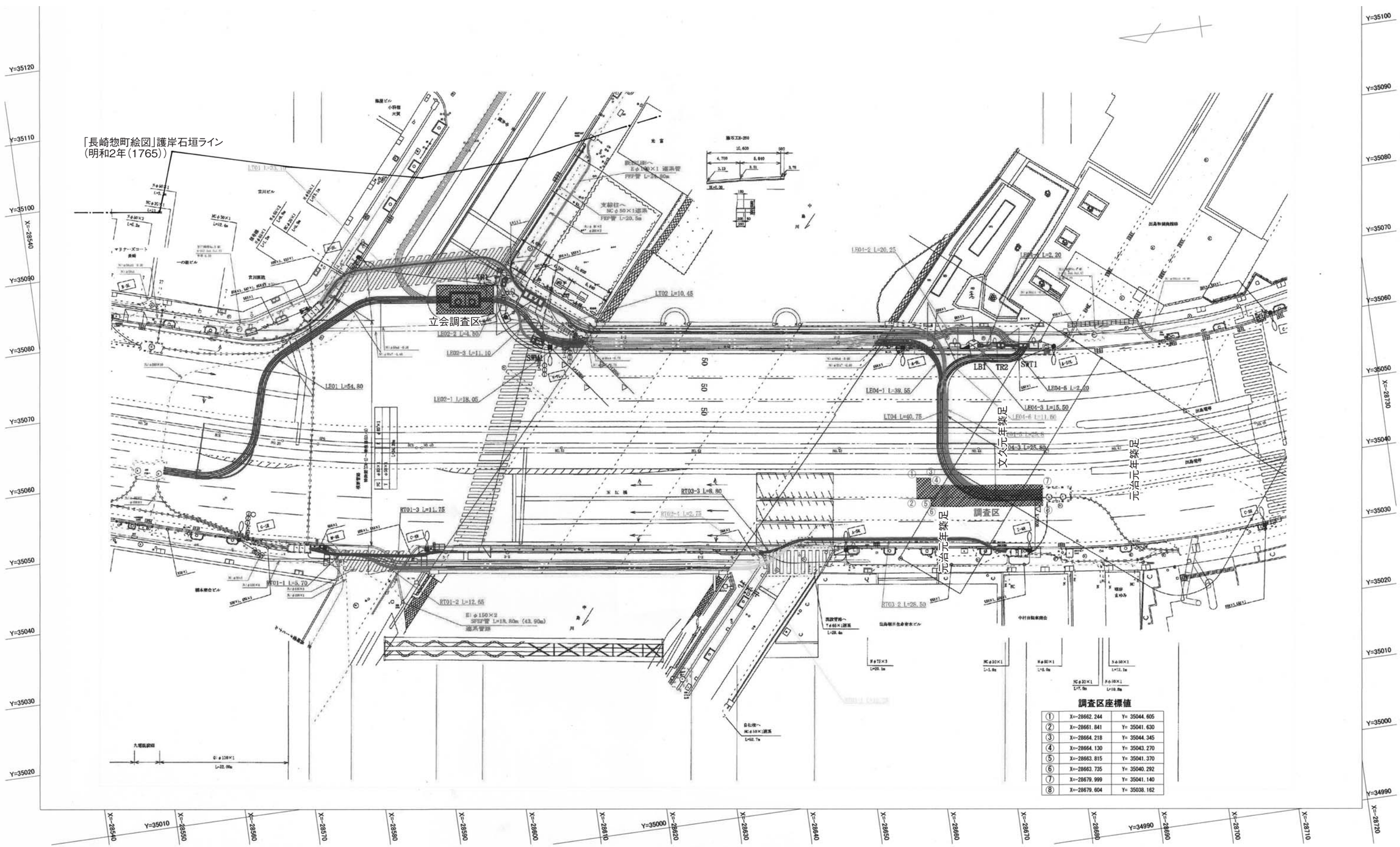
日見峠以南の彦山、金比羅岳などの火山地は中起伏山地で、矢岳では溶岩台地、唐八景では、緩傾斜面となっている。周辺の小起伏山地ならびに山麓地は家屋の密集地帯となっている。長崎港と大村湾との間にある地溝状低地の北部に起伏量50～100mの浦上・時津丘陵地がある。帆場岳火山地と彦山火山地の間を中島川流域の両岸に比高10m内外の岩石段丘を有する。この岩石段丘は長崎港に向かって舌状にのび、段丘上に長崎県庁、市役所が立地している。

・表層地質[註2]

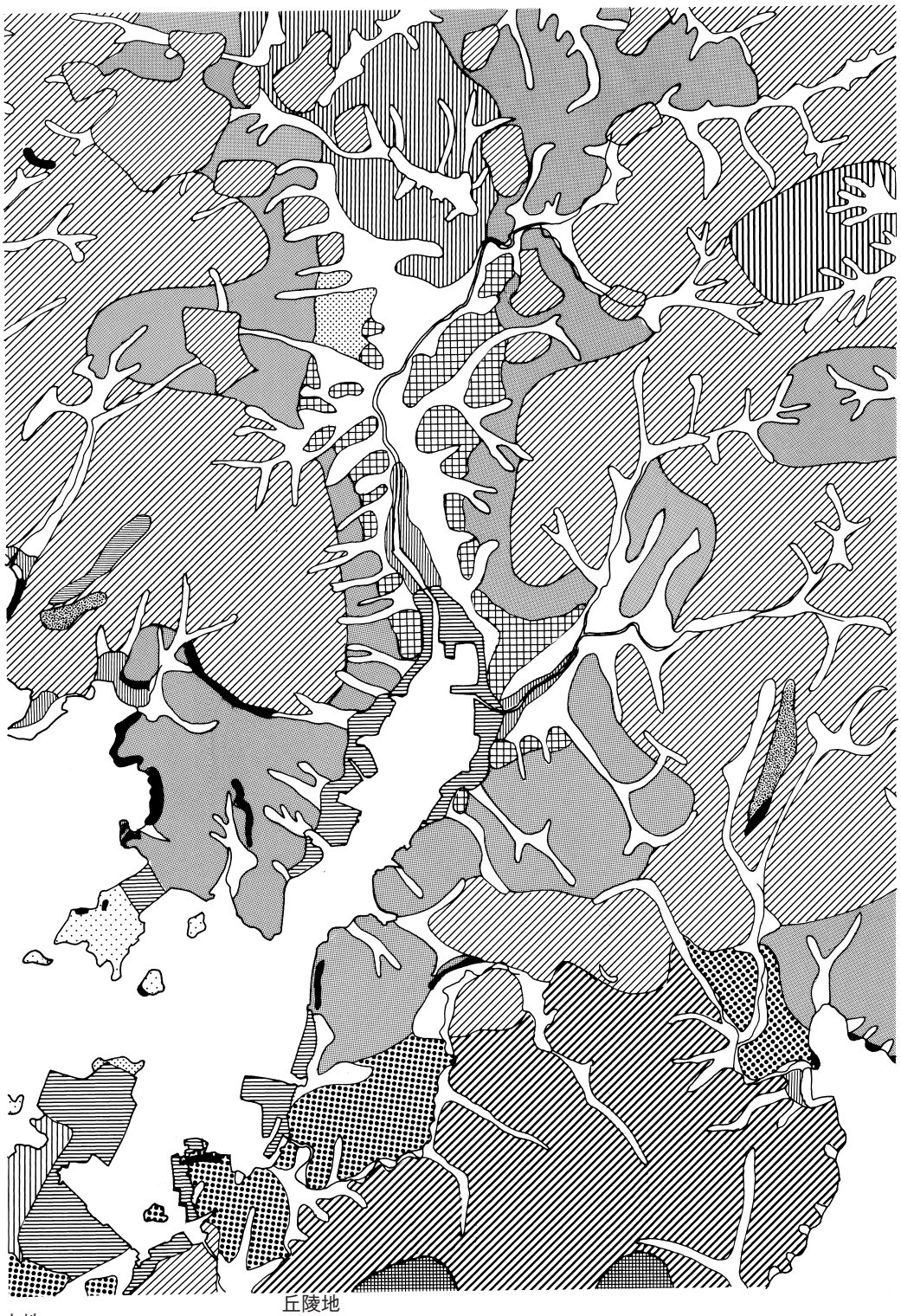
野母・西彼杵半島は共に結晶片岩類よりなり、野母半島はとくに緑色片岩の発達が著しい。堆積岩類の大部分は、古第三系に属し、西側では、高島炭田北部にある。長崎市中心部の埋立て土の下には、貝殻を含む泥層が在り、出島貝層と呼ばれている。中島川に沿って長崎県庁や長崎市役所が建つ段丘は、共に安山岩礫を多量に含む段丘礫層により構成される。

・土壌[註3]

長崎の市街地を中心とし、南部は、結晶片岩、残りは安山岩地帯に大別される。安山岩を母材とし褐色森林土壌が、長崎近郊の沢筋に存在する。褐色森林土壌（黄褐系）は結晶片岩を母材とし、黄褐



第１図　本調査・立会調査配置図（１/500）



第 2 図　長崎市内地形分類図

色を呈していて、長崎市郊外唐八景以南の谷沿いに分布している。

註文献１～３「長崎」大長崎都市圏総合開発地域土地分類基本調査

２．長崎開港（第３図）

長崎の開港は、大村純忠（第18代大村領主）がポルトガルとの貿易を目的として元亀２年（1571）に開いている。貿易開始時は、島原町・分知町・大村町・外浦町・平戸町・横瀬浦町の六町で構成されていた。天正15年（1587）豊臣秀吉が宣教師追放令を発布し、翌年に長崎を没収し直轄領としている。

江戸幕府においても同様に長崎を天領とし、開港時から増加し続けたキリシタン信者への弾圧を強化するようになり幕府は慶長17年（1612）に禁教令を発布した。

寛永11年（1634）に長崎の有力町人25人の出資によって、中島川河口に造らせた人口島は当初、ポルトガル人を居住させることを目的として寛永13年（1636）に完成している。

寛永14年（1637）の島原の乱後、幕府は寛永18年（1641）平戸和蘭商館を長崎の出島に移転を命じている。これにより、長崎は西洋の唯一の窓口としての地位が確立していった。

３．出島の埋立て

（１）出島の埋立て

安政元年（1854）日米・日英・日露の和親条約の調印後、安政２年（1855）日蘭和親条約の締結時に出島のオランダ人は「警固役人無之出島より出行候儀可為勝手次第事[註4]」が認められる。出島は、オランダ人、プロシア人、フランス人が居住し、文久元年（1861）には英領事もカピタン部屋に居住し、交易の中心となっていった。この間出島の埋立てを万延元年（1860）～慶応３年（1867）に行なっている。

また、安政５年（1858）の日米修好通商条約調印後、長崎は安政６年（1859）に開港され、出島を居留地とするオランダを基準として、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア４カ国が大浦[註5]に居留するための海面地埋め立てが行なわれた。大浦地区居留地の造成は３次の造成計画で実施されている。第１次造成は、安政６年（1859）～万延元年（1860）までに行なわれている。第２次造成は文久元年（1861）に実施し、第３次造成を元治元年（1864）に行なっている。その後、居留地は、明治32年（1899）７月に条約改正により、長崎外国人居留地が廃止されている。

註４『出島図』－その景観と変遷－「第３章　開国後の出島」　著　中村質260頁（「目安方手頭留」安政２年）　長崎市発行1987．３

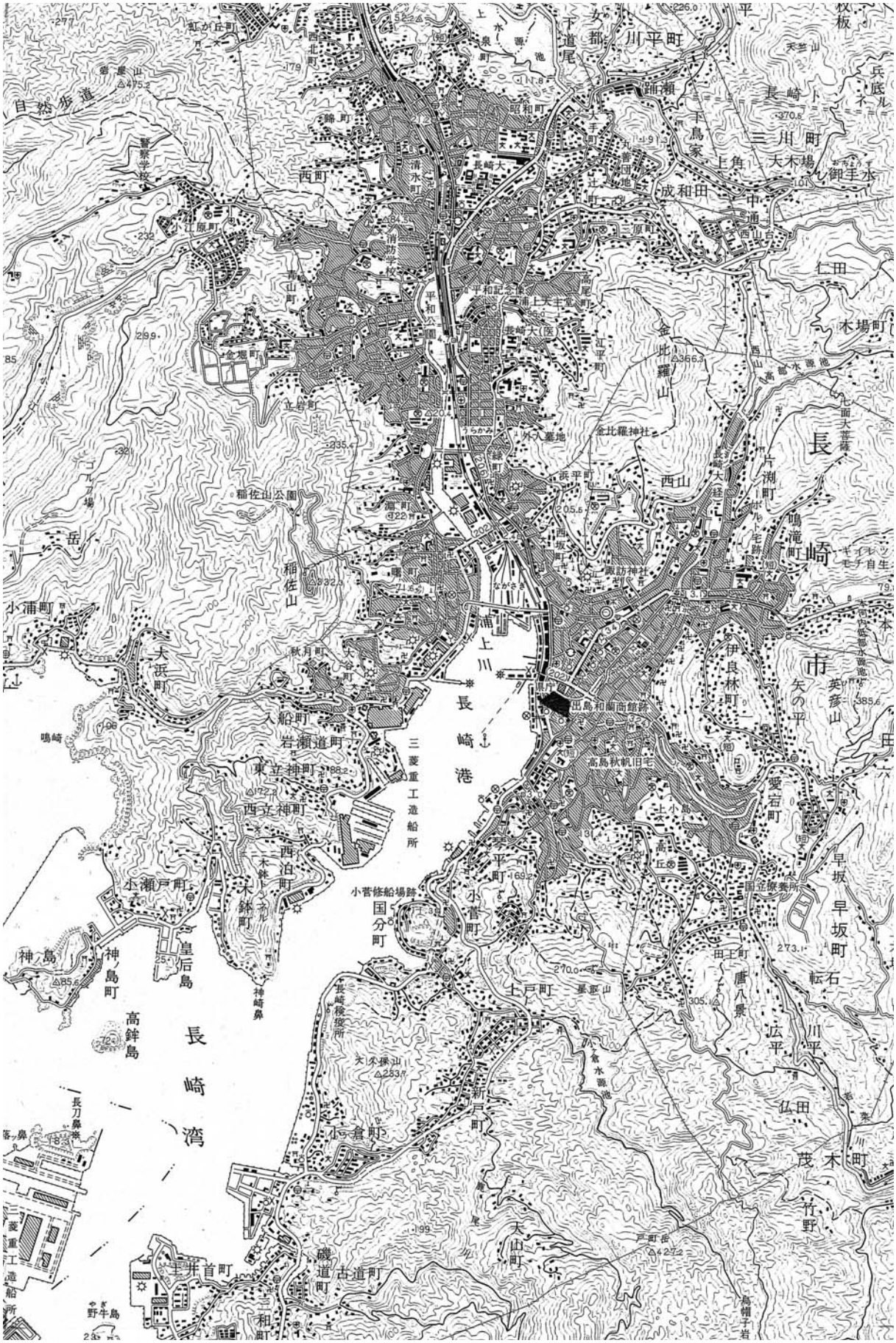
註５『長崎大学留学生センター紀要．VOL5. P. 17-36；1997「長崎外国人居留地関係資料に関する一考察：長崎の「国際化」の背景」浜口美由紀著　長崎大学学術研究成果リポジトリ

参考文献；「長崎港の埋立と近代都市の形成」『土木史研究第12号自由投稿論文』1992年６月　著　長崎大学工学部　正会員　岡林　隆敏・パシフィックコンサルタント（株）正会員　石田　優

Ⅲ　調　　査

１．調査概要（第４図・図版１）

商館跡は、現在の長崎港フェリーターミナルから約500m南東側に所在し、標高2.7mを測る。



第 3 図　出島和蘭商館跡位置図（1／50,000）

調査は、アスファルト及び路盤をコンクリートカッターでの区画切りから実施する。コンクリートカッター２台で長さ18m×幅１m×深さ0.5mの切り込みを４本アスファルト道路に入れる。調査区はこのカッターで切られた道路の南側から北側へ幅４m×長さ６mを１区画として１区・２区・３区を設定した。アスファルト舗装、砂利敷き部分約70cmを除去し、埋土を層ごとに精査を行なった。

２．土層（第５図・図版２）

埋め土の土層堆積は、北側から南側へ土の傾斜が見られ、埋め土投入状況が２区～３区で確認された。堆積土は、アスファルト舗装を１層、砂利敷きを２層とし、以下に３層の黄褐色風化礫層が約１m堆積している。コバルト釉薬を使用した碗が出土していることから明治時代以降に運ばれてきた埋め土と言える。また、安山岩風化礫が土に混じっており、長崎の沢筋から持ち込まれた土と考えられる。４層は暗赤褐色粘質土層で二枚貝類を多く含んでいる。５層は黒褐色砂質土層で近世陶磁器・瓦等の遺物と破砕貝類を多く含んだ土である。

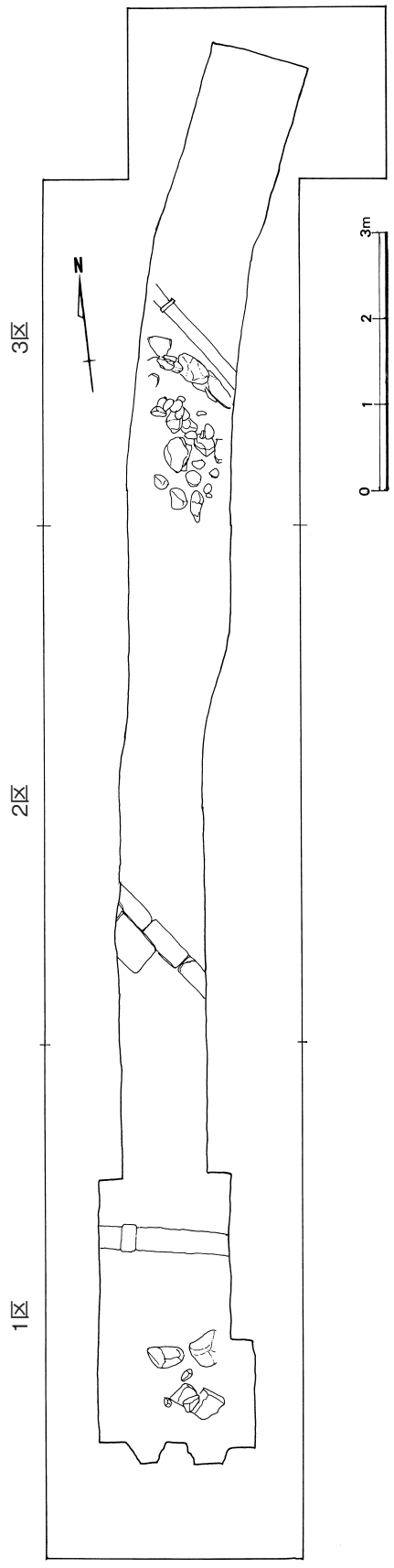
３．遺構（第６図～第７図・図版２）

・石組

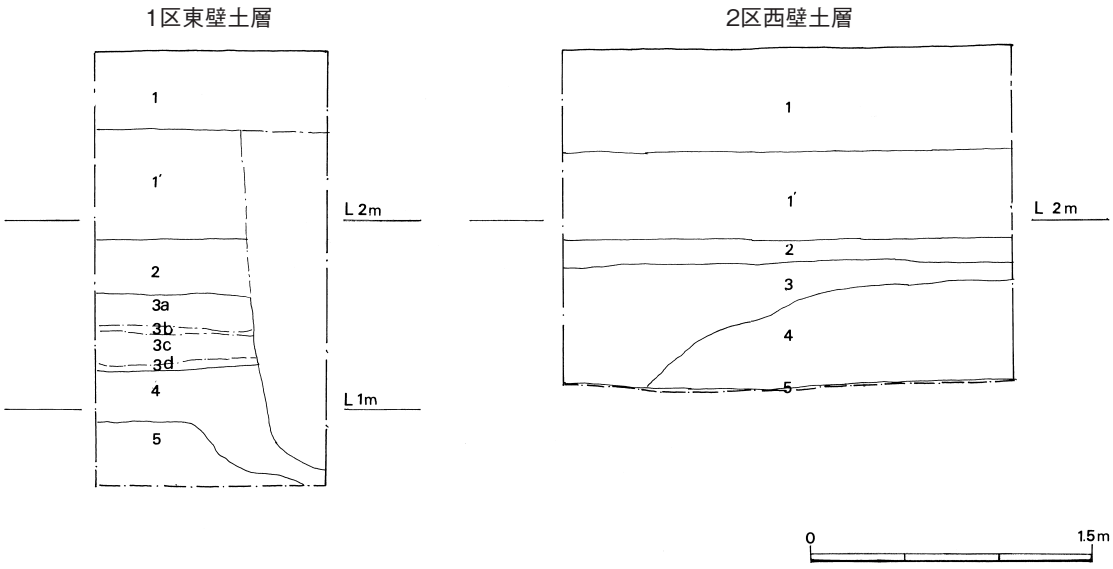
２区で確認した遺構で、長方形に加工した砂岩の石を東西方向に３個繋ぎあわせ、南側に幅30cm×縦50cm程の砂岩の石を溝蓋石のように平行に設置している。

・石垣

２区北側端部に近い場所で、石垣天頂が標高約1.7mを測る元治元年（1864）の石垣を検出した。石垣は北西から南西に延び出島の荷揚場に取り付くことが想定された。石垣の石材は玄武岩を使用していている。現状で３段確認したが、天頂部は鉄管を覆うコンクリートのレベルとほぼ同レベルであり、石垣の間にもコンクリートが詰め込まれており、コンクリートの流し込みの際に天頂部の石垣が移動した可能性が高いと思われた。また、この石垣を覆っていた土は、４層の赤褐色粘質土であった。



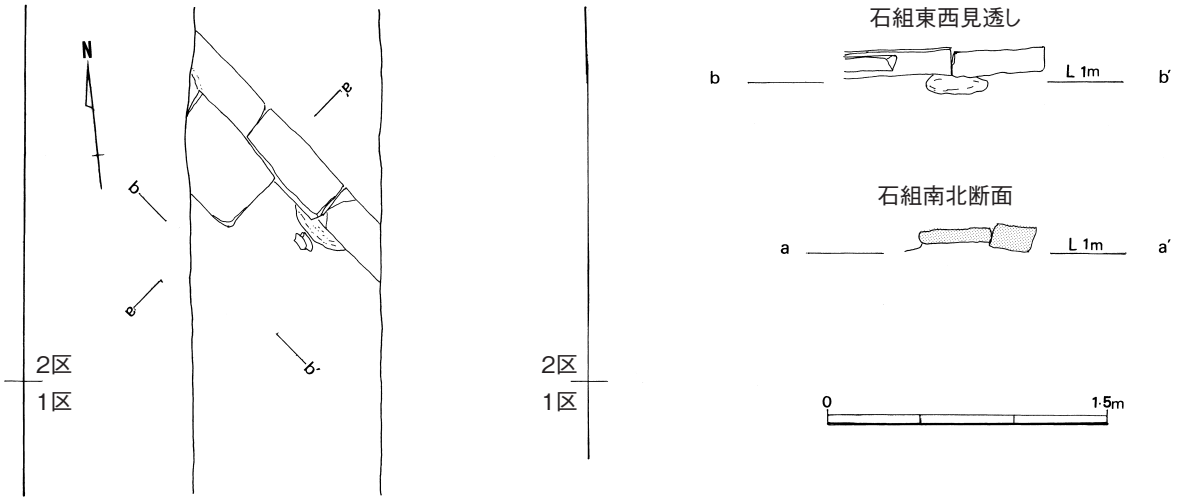
第４図　調査区配置図（１/80）



第５図　土層（１/40）

１区東壁土層（１/40）
１　層；アスファルト
１’層；コンクリート基盤
２　層；砂利層
３ａ層；暗灰色砂礫層
３ｂ層；青灰色砂礫層（１～３㎝の角礫混入）
３ｃ層；黄褐色粘質土（明治期のコバルト碗出土）
３ｄ層；暗灰青色細砂層
４　層；暗褐色粘土層（黄褐色粘土含む。礫少量、炭微量）
５　層；黒灰色砂礫層

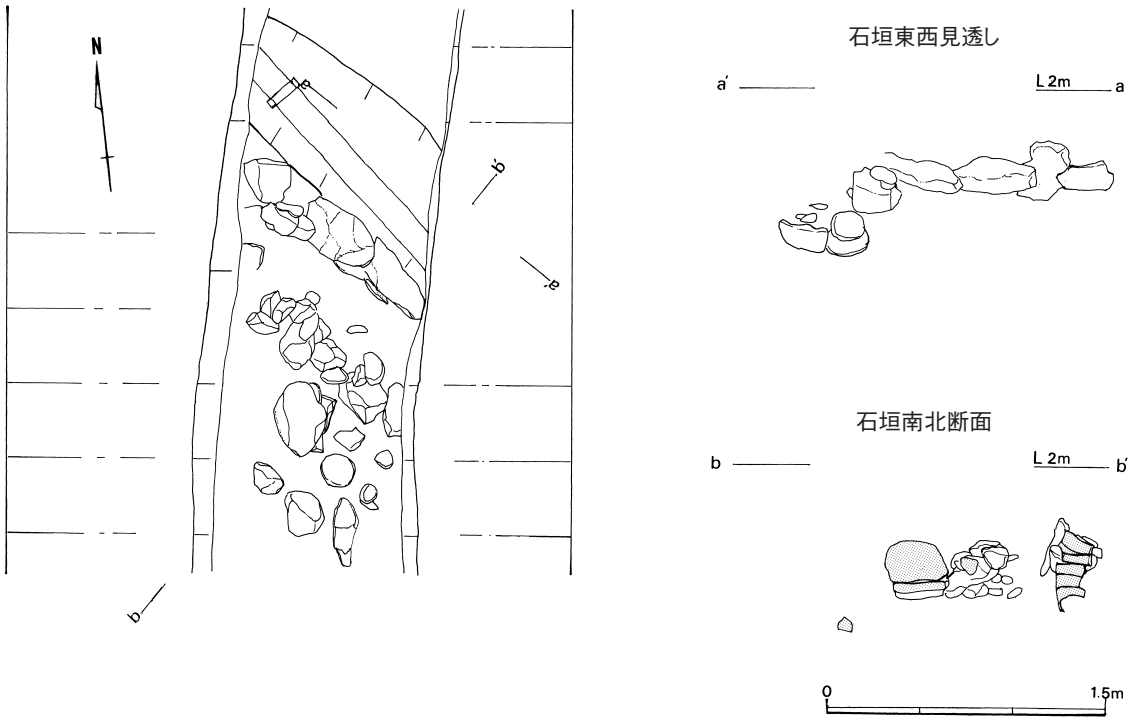
２区西壁土層（１/40）
１　層；アスファルト
１’層；コンクリート基盤
２　層；砂利層
３　層；灰黄褐色砂質土層（粘性無く、締まりが無い土で灰白色粘土ブロックが混じる）
４　層；暗赤褐色土層（粘質性があり、良く締まり貝類が疎らに混入する。）
５　層；黒色砂質土層



第６図　石組遺構（１/40）

４．遺物（第８図～第22図）

遺物は、１区～３区で79点を掲載している。この内、明治以降の出土遺物として、１区３層の黄褐色風化礫層からコバルト釉薬を使用した碗が出土している。出土品には、西洋陶器が多く含まれており、出島での生活道具として使用されたものが、元治元年の築足で埋め土に混じって廃棄されたもの



第７図　石垣遺構（１/40）

と考えられる。

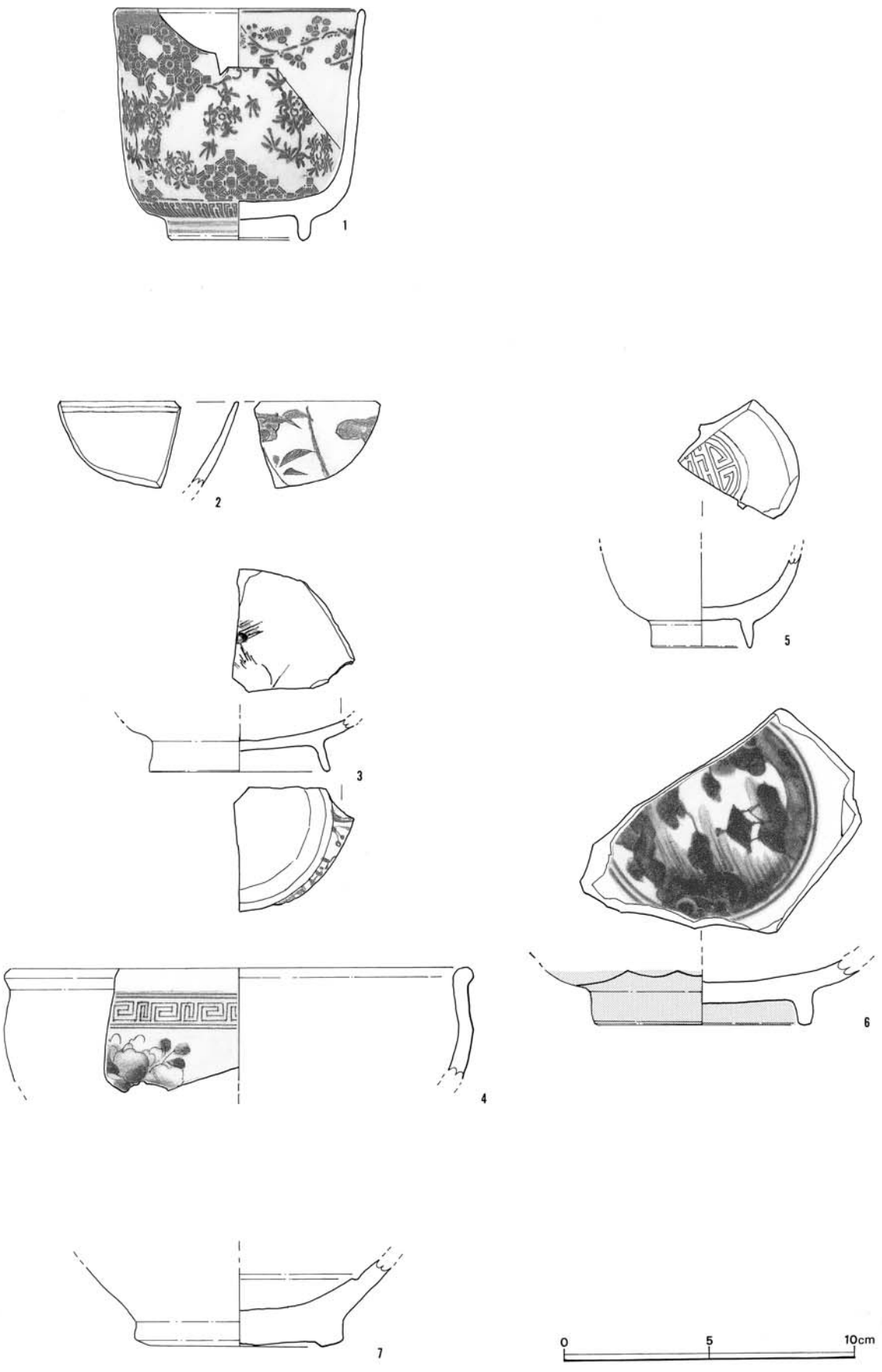
１区出土

①碗類（第８図）

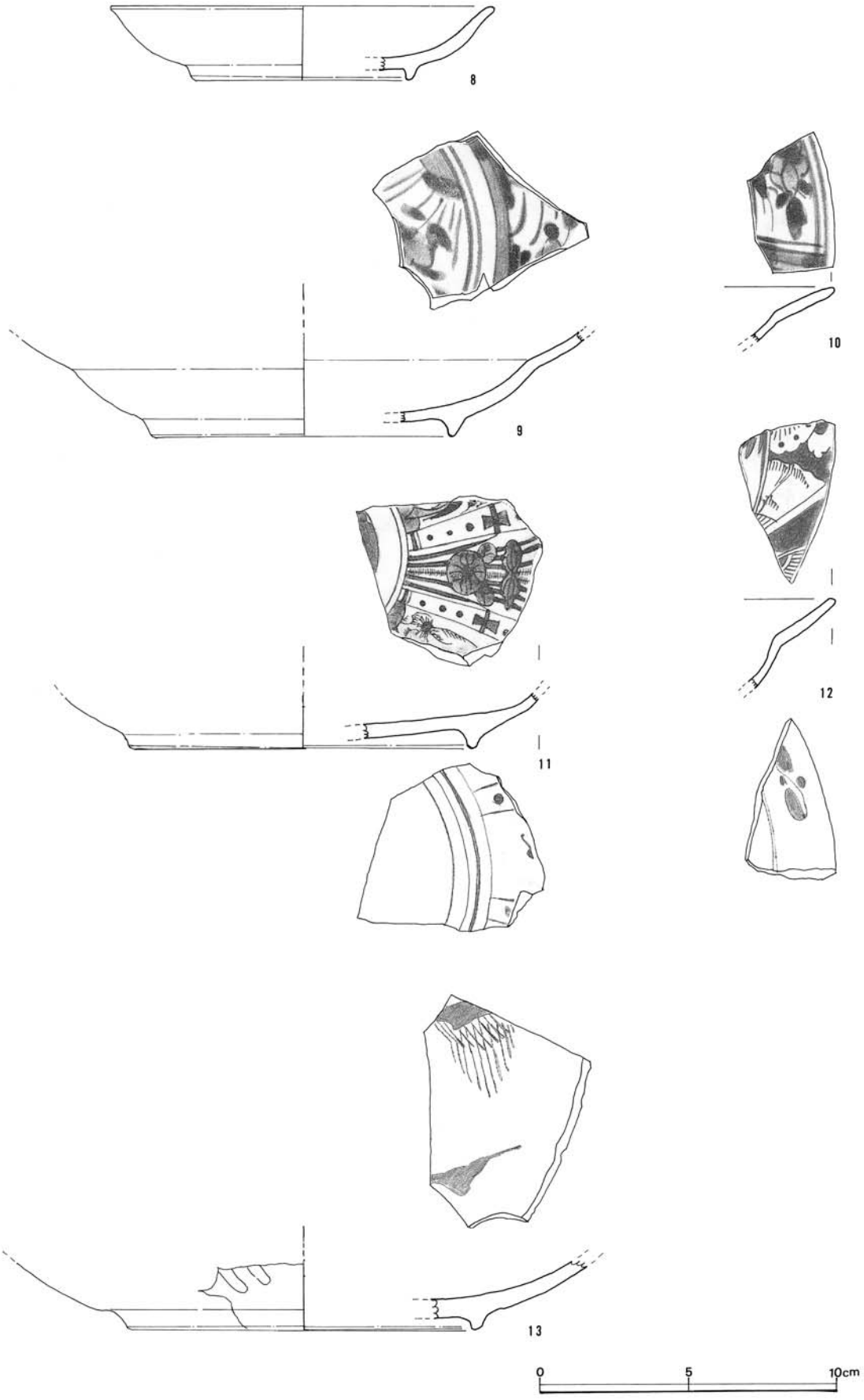
１は４点接合のコバルト呉須による花卉の文様を型紙で付けている。畳み付けは無釉とし、高台外面に２本の圏線を付け、体部下端に簡略化した蓮弁の連続文様を一単位として一周させる。内面は口縁上部に花木の型紙絵を写している。器面、見込み及び高台内は透明釉を掛けている。胎土は、白色の精製された陶石を用いている。明治時代以降の所産。２は陶磁器碗。比較的薄い口縁部で、花木を描く。内面は口縁端部に２本の圏線を入れる。３は陶磁器の皿。胎土は白色を呈し、精製された陶石を使用。内底見込みに風景画を描く。外面に文様があり高台は高く、畳付は無釉としている。４は、陶磁器の香炉の口縁部であろうか。口縁端部を丸く厚みを持たせている。外面の口縁下に雷文を一周させ、以下に青呉須で花卉を描く。５は、陶磁器の小杯。胎土はザックリした白色の陶石を使用。見込みに寿を図案化した線刻を施す。全体的に貫入が入る。青白色を呈する。高台を高く作る。６は、陶磁器の碗。見込みに風景を描き、圏線２本で囲む。畳み付けは無釉とし、青味を帯びた釉が高台内、体部に掛かる。７は、陶器の碗。胎土は黄灰色を呈し、残存部での外面は無釉とし、内面は見込みと体部の堺に段が付く。高台は低く、高台内にロクロ引きの痕が残る。

②皿類（第９図）

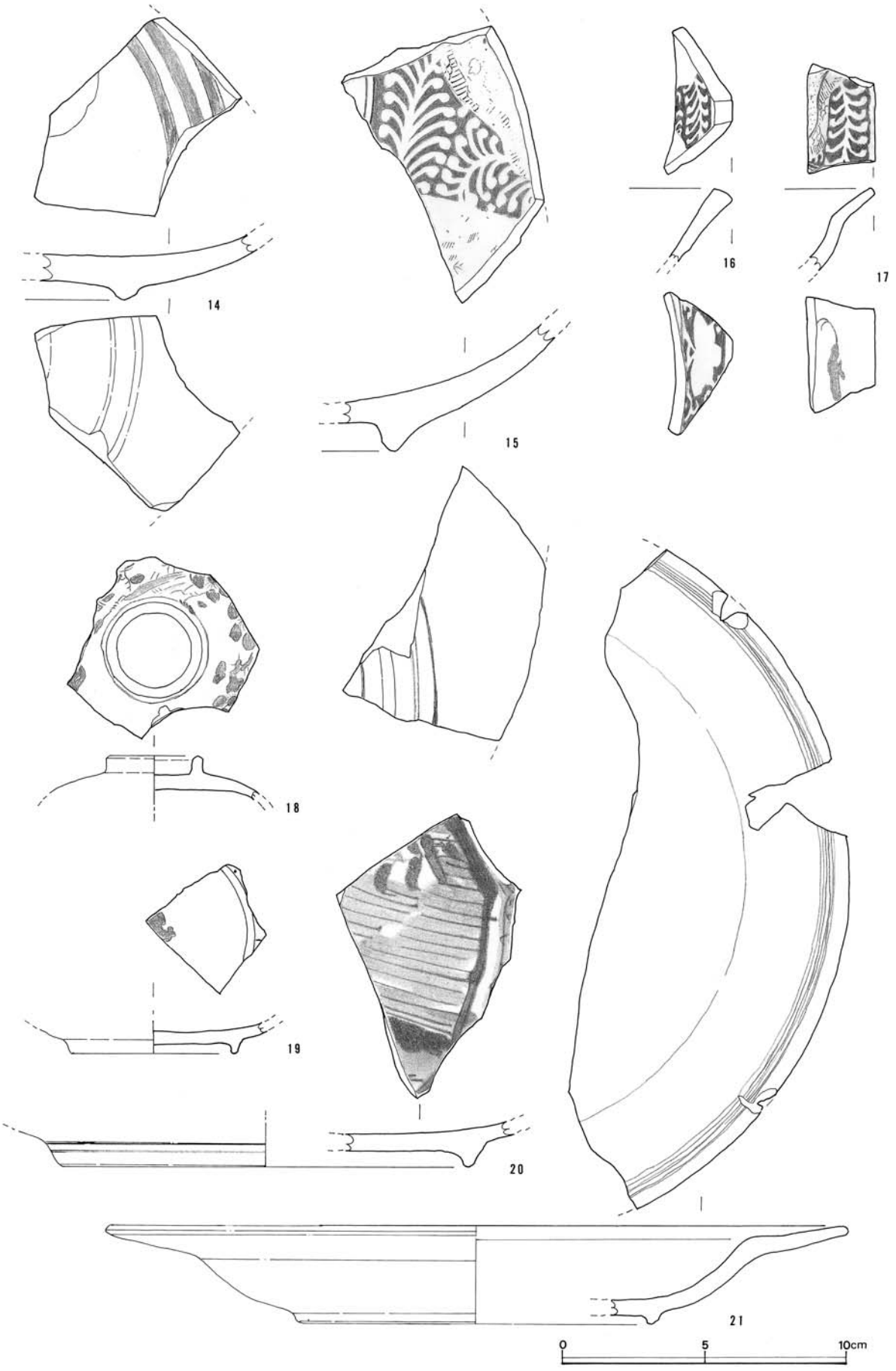
８は陶磁器の小皿。口縁端部が外反し、全体に透明釉が掛かる。９は陶磁器の皿。胎土は、灰白色を呈し、やや精製された陶石を使用している。端反りの口縁を持つ。高台は、内傾気味の作りで畳付も施釉している。見込みには、花卉の文様を呉須で描いている。10は陶磁器の皿で、口縁端が反り区



第8図　①碗類（1区3層～5層）



第9図　②皿類（1区4層）



第10図　③皿類（1区4層～5層）

画内に花卉を描く。胎土は、暗白灰の精製した陶石使用。19世紀の資料。11は、陶磁器皿で、見込みから内面体部にかけて花卉を描く。高台畳付は無釉としている。高台内に１本の圏線を入れ体部と高台の堺にも１本の圏線を入れ、体部は区画内に点を縦に並べ描いている。19世紀の所産。12は、陶磁器皿で端反口縁としている。胎土は、白色の精製陶石を用いている。絵柄は自然風景と花卉を描く。13は陶磁器の皿。胎土はザックリとした白色の陶石を使用。見込みに自然風景を描く。高台は、無釉とし丸味を帯びる。全体に透明釉が掛かる。

③皿類（第10図）

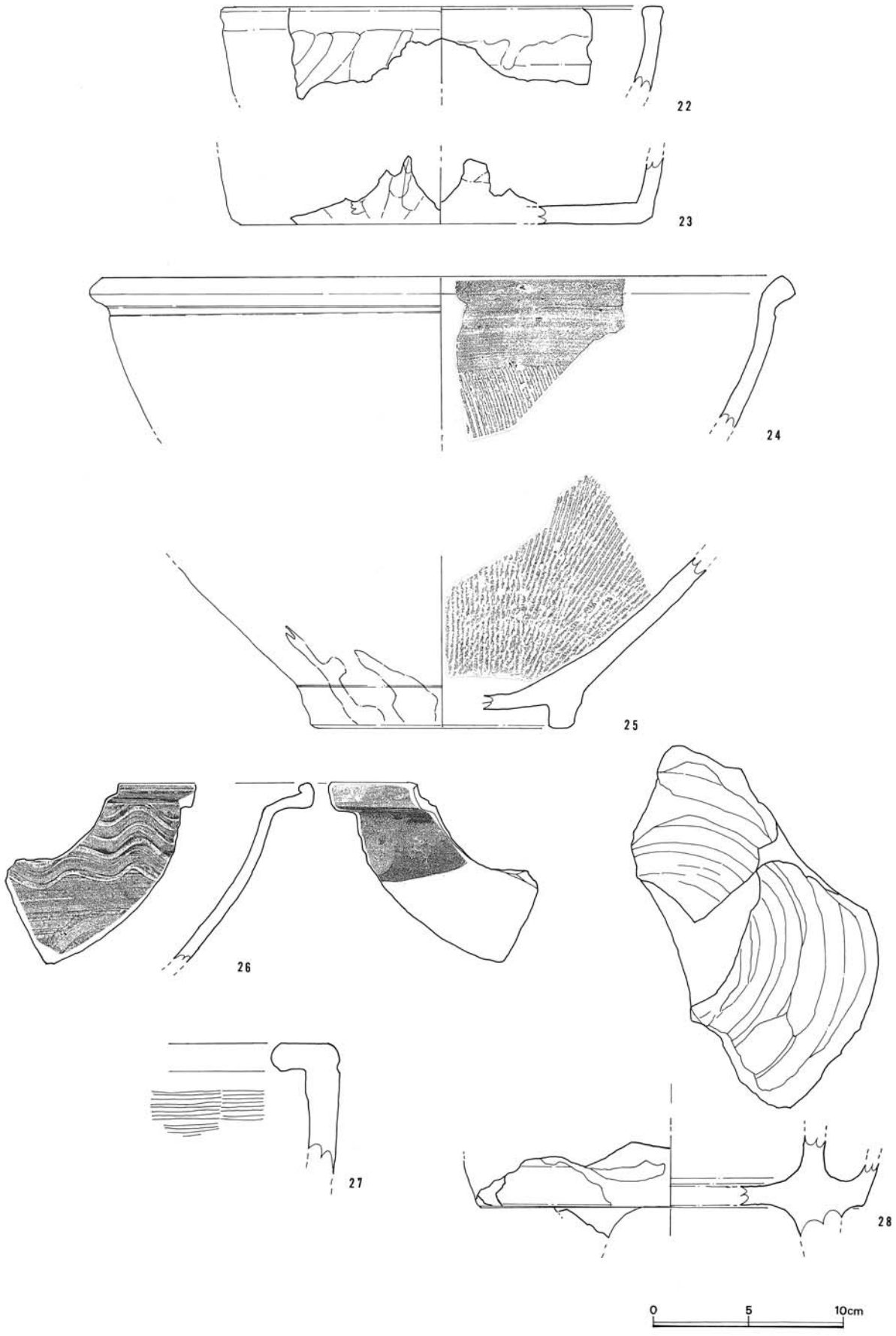
14は青磁皿で高台内は蛇の目釉剥ぎし鉄錆塗布を行い、中央部は釉が掛かる。高台畳み付けは丸味を帯び、内面に３本の片切り彫りの圏線が入る。器面の色調は薄い緑色を呈している。15は、陶磁器の皿。畳み付けは無釉とし高台内は釉が掛かり圏線１本を引く。外面は体部下端に圏線３本を青呉須で引く。内面は赤絵の装飾と黒色の線で縁取りをされているが、縁取りされた部分の色彩は剥落し文様が不明瞭になっている。16は、陶磁器の赤絵。胎土は、白色の陶石を使用し、内面と外面に赤絵を付けた口縁部の破片。17は赤絵陶磁器の皿。内面の口縁部赤絵の文様とし、外面は呉須で絵付けをする。口縁部は端反りである。18は、陶磁器の蓋。高台畳付部分は無釉とし、この外は透明釉を掛ける。外面に樹木（松）を描き、内面に圏線が１本引かれているのが僅かに残る。19世紀代。19は皿で、火を受けて文様が不明瞭となっている。コンニャク印判見込みとし、胎土は、ザックリした陶石で白色の色調を呈する。畳付は平坦としている。20は皿。胎土は、黄白色を呈し、陶石はザラつきがある。絵付けは、自然風景を描いている。呉須の色はくすんだ青色を呈する。外面の高台と体部の堺に２本の圏線を引いている。21は、陶磁器の皿。胎土はザックリとした白色の陶石を使用。口縁部は端反り口縁としている。高台は丸味を持ち畳付にも透明釉を施釉している。

④鉢類（第11図）

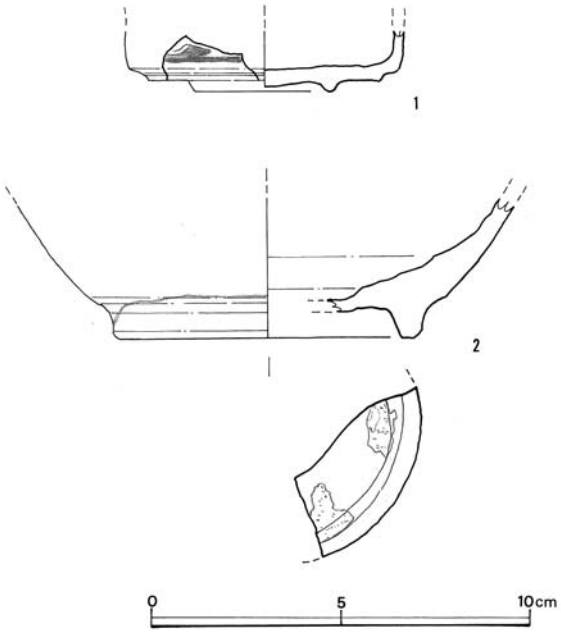
22は陶器の鉢。胎土は赤味のある赤黄色。口縁部を平坦とする。外面は鉄釉が掛かり茶黄色を呈している。内面は口縁部に灰釉が掛かり灰黄色としている。内面体部には、鉄釉で横位の線文を引く。23は、陶器の鉢。胎土は赤黄褐色で、体部と見込みに鉄釉が掛けられている。底部は回転ロクロ成形の時の石英粒が右回りで移動していることが観察される。平坦な底部には釉は掛けていない。24は陶器の擂鉢。胎土は、暗赤灰色でザックリした粘土を使用する。内外面に鉄釉が掛かり、焦茶色のつやがある。内面に等間隔の櫛状線刻引きを入れている。25は、陶器の擂鉢。内面に矢羽状の線刻を入れ内面全体に黄灰釉を掛けて焼成している。胎土は、赤褐色を呈し、窯の温度が上がっていないためやや脆く、水甕のような焼きしまりはない。26は陶器の鉢。胎土は、鼠色で、色調は、外面は茶褐色の地肌に口縁部から釉が垂れている。内面は意識的に直線と波形線を組み合わせて緑色の釉と白色砂で色彩をかたどっている。27は陶器の火入れ具。全体に無釉で、口縁部を平坦にし、口縁下に太い凹線を引く。内面に指押痕と水引痕が残る。胎土は、肌色をし、器面は白黄色を呈する。28は陶器の火入れ道具。胎土は、淡黄色で、乳頭状の脚が付く。内面は高さ３㎝程の稜を持つ仕切りが一周すると想定される。

２区出土

⑤碗類（第12図）



第11図　④鉢類（1区4層～5層）



第12図　⑤碗類（２区４層）

１は陶磁器の碗。蛇目釉剥ぎの外底とし、畳付、高台内には釉薬が付く。また内面も全面に施釉している。胎土は緻密な白灰色の陶石を使用し、外面にわずかに呉須による文様が残る。２は陶器の碗で、胎土は暗茶褐色を呈する。高台内に白色の胎土目痕が付く。色調は、外面に灰釉が高台を除く体部に付けられ、内面は無釉としている。

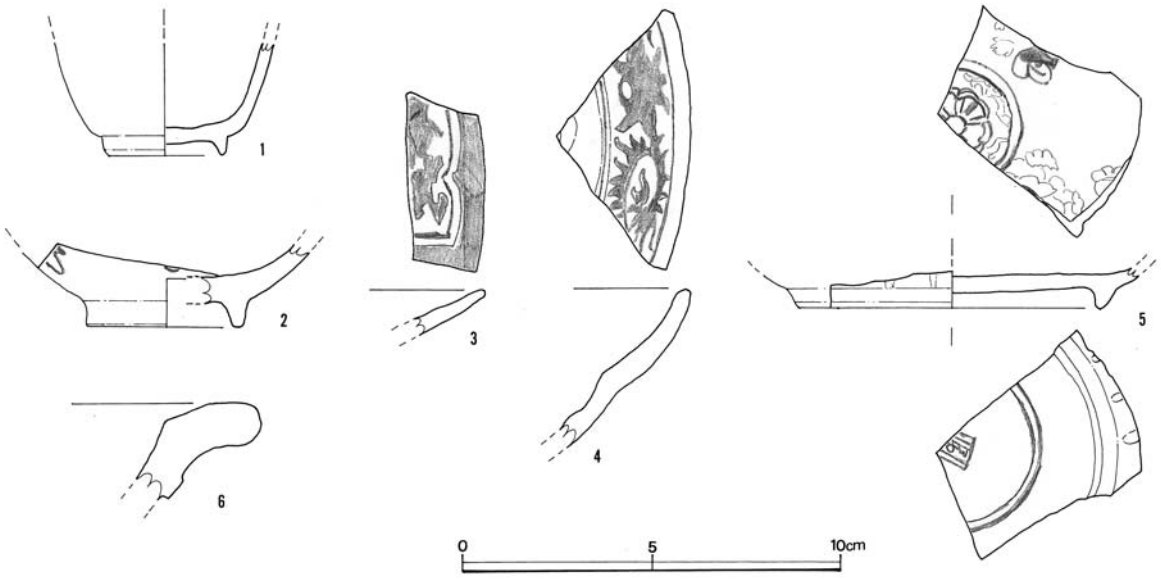
３区出土

⑥碗・皿・甕類（第13図）

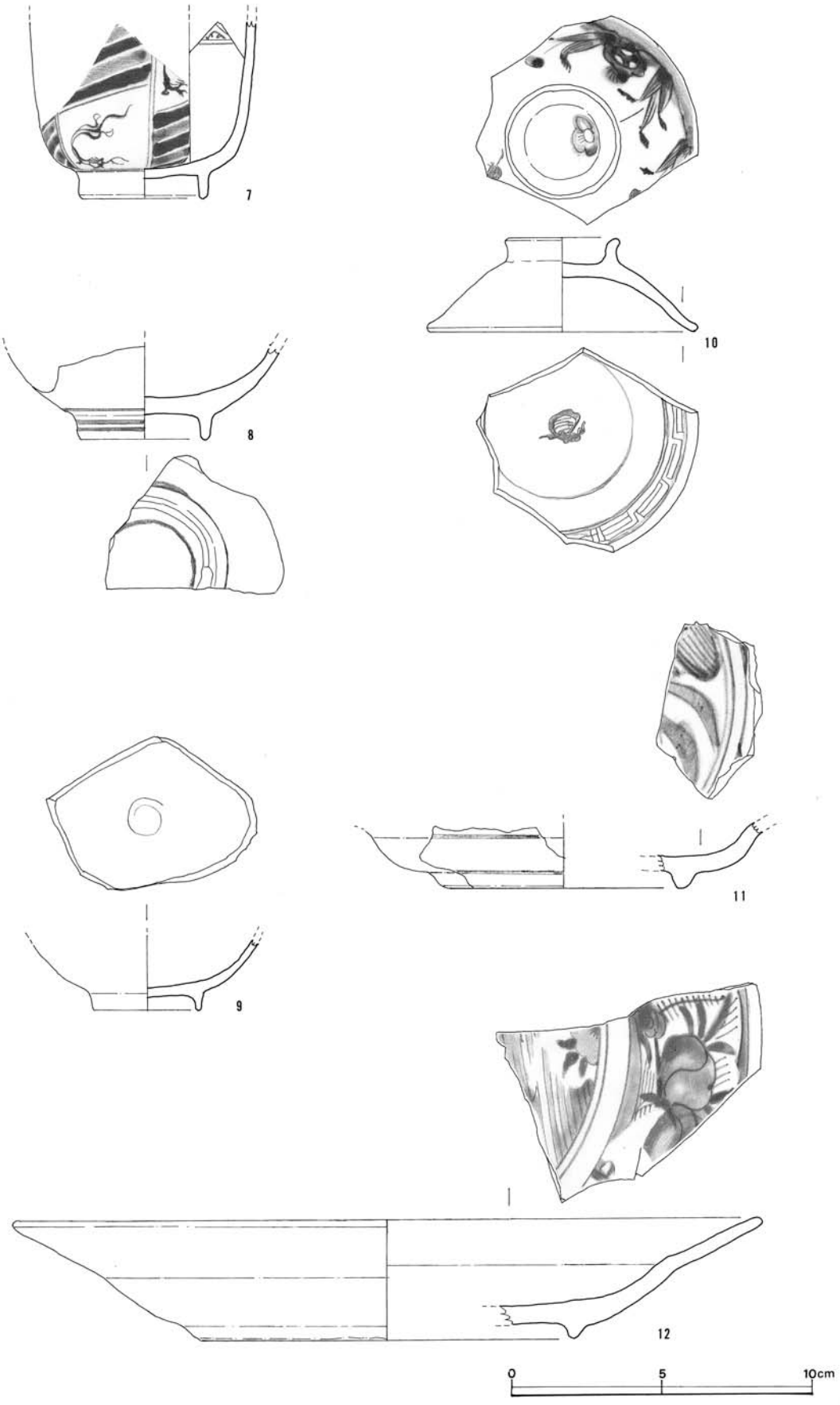
１は陶磁器の小杯。胎土は白色に黒色の小斑（0.5㎜以下）が混入する。全体に透明釉が掛かり白黄色の色調を器面は呈している。畳付は、無釉である。２は陶磁器の碗。胎土は灰白色を呈し、黒い斑点で0.1㎜程度が多少混入する。畳付は無釉とし、砂が付着する。釉薬は見込、外面、高台内に比較的厚く掛かる。体部に一部文様が描かれている。３は皿。胎土はやや黄色味が強い白色。文様は芙蓉手に似せた図柄。表面は光沢はなく、鈍い光沢を放っている。口縁端部まで呉須で彩色している。４は陶磁器の皿。口縁部で内湾する。胎土は灰色をした精製された陶石を使用している。内面に青呉須で文様を描き、器面の色調は青味を帯びる。５は陶磁器の皿。赤絵が見込みに描かれているが、殆どが剥落し明瞭でない。高台畳付は無釉とし高台内に２重の圏線と名款を記す。胎土は白色の緻密な陶石を使用する。６は陶器の甕。胎土は暗赤褐色で器面の色調は茶褐色を呈する。

⑦碗・蓋・皿（第14図）

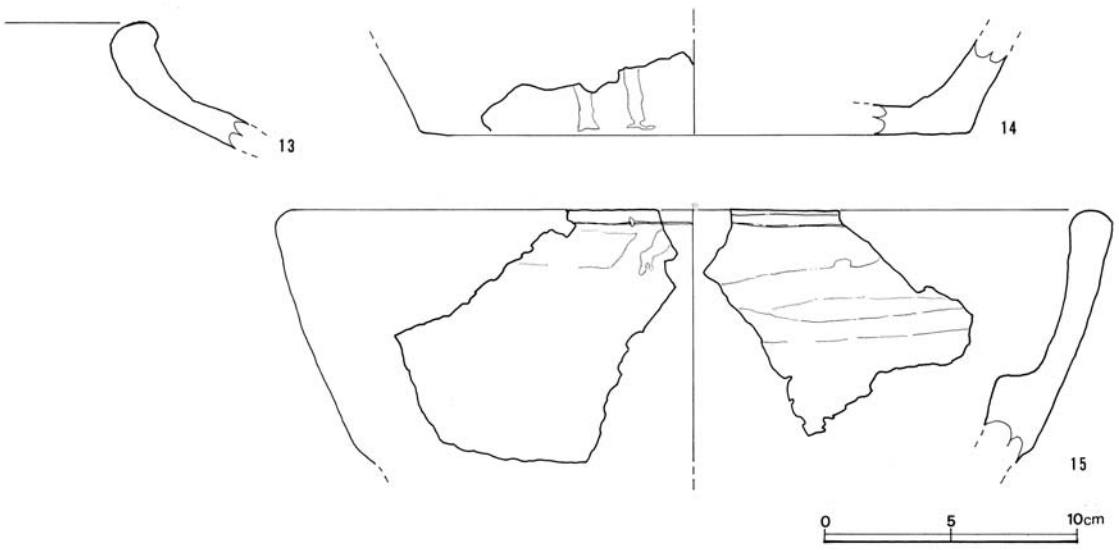
７は陶磁器の碗。胎土は白灰色で、畳付及び全体に透明釉が掛かる。体部文様は、龍と斜線で描き



第13図　⑥碗・皿・甕類（３区４層）



第14図　⑦碗・蓋・皿類（3区5層）



第15図　⑧壺・鉢類（３区５層）

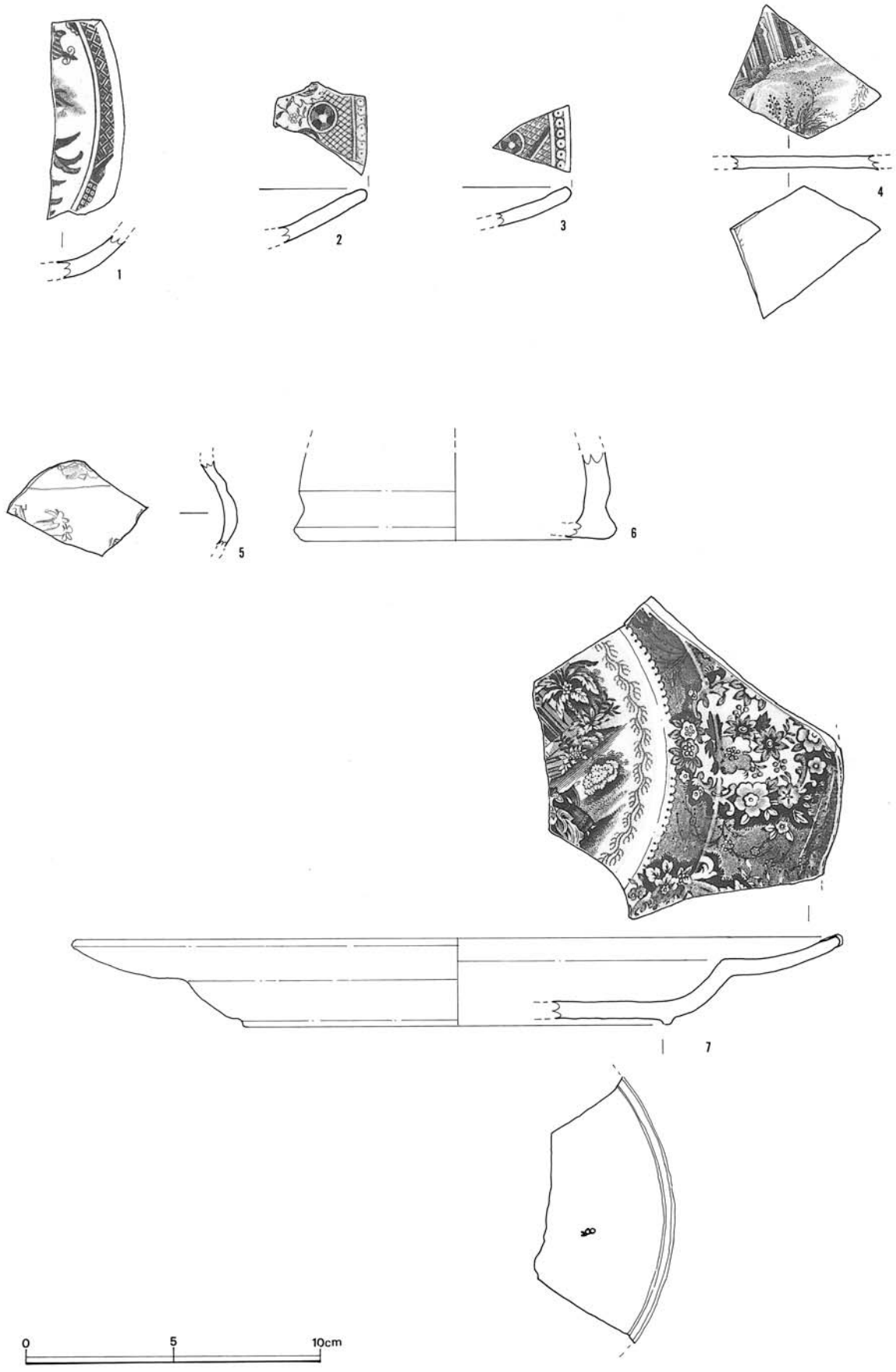
内面の一部に文様が残るが文様形態は不明。高台は比較的高く製作されている。８の胎土は、白色の精製された陶石を使用する。畳付は無釉とし、内外面及び高台内に透明釉を掛ける。見込みにハリ支え状の不純物粒が残る。文様は、圏線を高台に２本、体部に１本、高台内に１本引く。９は陶磁器の小杯。胎土は白色、緻密な陶石を使用している。畳付は無釉とするが全体的に透明な釉が掛かる。文様や片彫りも見られない。10は陶磁器の蓋。胎土は白色でザックリした陶石を使用し、高台は外開きになり、高台内に花の絵を描き入れている。体部は口縁から高台に向かって植物の絵を描いている。内面は、口縁部に雷文を連続させ見込みに植物？と圏線１本が描かれている。11の胎土は白色の粗い陶石を使用する。全体に貫入が入る。見込みに植物の絵、外面に圏線が高台付け根と体部にそれぞれ１本引かれている。畳付に施釉し、高台内は無釉としている。12は、陶磁器の皿。胎土は白色の粗い陶石を使用する。全体に貫入が入る。見込みに植物の絵を描き、外面に圏線が高台付け根と体部にそれぞれ１本引かれている。畳付に施釉し、高台内は無釉としている。

⑧壺・鉢類（第15図）

13は陶器の壺。胎土は暗灰色を呈し、鉄釉を外面に掛けて茶灰色を呈する。内面は焼成による色調で暗オレンジ色を呈する。口縁部は、丸く納めている。14は陶器の壺底部。胎土は暗赤褐色を呈する。色調は外面が黒茶褐色で内面は、灰釉が掛かり黄白色を呈している。15は陶器の火入れ具。胎土は明赤褐色に石英粒（１㎜前後）が混じる。色調は外面に鉄釉が掛かり、黒茶色を呈する。内面は露体の口縁部に１本の鉄釉圏線と体部に２本の鉄釉圏線が入る。体部の残存下端に段を作り出っ張り部にも鉄釉を掛けている。

⑨西洋陶器類（第16図）

１は西洋陶器の皿。胎土は、粉末の石膏を固く締めたような白色を呈する。内面見込みにコバルトによる文様が描かれている。内外面ともに光沢のある鉛釉が掛かっている。２はイギリス製の西洋陶器皿の破片。胎土は白色、ザックリした胎土。口縁部内面に格子の文様と花卉が描かれている。染付楼閣山水文の文様でパターンは３と同様のウィロウである。３は西洋陶器の皿。胎土は白色で、口縁端部は無文とし、内面は幾何学文様をコバルトでプリント絵付けを行なっている。全体に釉が掛かり



第16図　⑨西洋陶器類（1は1区5層、2～4は3区4層、5は3区5層、6は1区5層、7は2区5層）

光沢をもつ。４は西洋陶器の皿。胎土は白色の色調で、石膏を固めたような胎土をしている。文様は見込みに風景画をプリントしている。色調は緑色を呈する。５は西洋陶器の瓶片で、黒色でプリント模様を付け、胎土は白色の石膏のような色調を呈する。全体に釉が掛かり光沢をもつ。６は西洋陶器の壺。口縁部と底部近くがくびれる独特の形態をしたアルバレロ型の白釉陶器で、淡黄色の胎土で内外に白濁した釉が掛かる。用途は、液薬を入れるための容器として利用されている。７は西洋陶器で胎土は淡黄白色で見込みに人物を描き、口縁部は花卉のブロックで巡らしたプリント絵柄。高台内に200の数字が印刷されている。器面全体に釉が掛かかり、光沢を帯びる。畳付は、蒲鉾状の薄い断面を呈している。口縁部は胴部で折れて内湾する。

⑩煉瓦類（第17図）

１～４は煉瓦に刻印が付されているものである。１は小口面幅4.3㎝の色調は、暗赤褐色で正面、右側面、裏面に天川（白色を呈した接着材）が張付く。小口面に「k」字状の刻印がある。２は小口幅4.45㎝を測り、色調は淡赤茶褐色で天川が正裏面及び右側面に付着する。「v」字状の刻印がある。３は小口面幅4.8㎝を測る。「千」字状の刻印がある。色調は、表面がやや焦茶色となるが胎土は明黄赤褐色を呈する。正裏面に天川が張付く。４は小口面幅4.9㎝。色調は赤褐色を呈し、焼成は比較的良好である。天川が裏面に張付き「十」字状の刻印が有る。５は小口面幅4.8㎝を測り、色調は明赤黄色（橙色）を呈し、天川が正面と左側面及び裏面に張付く。６は小口面幅4.6㎝を測り、色調は赤褐色を呈する。鉄の癒着が正面にあり、天川の張付き痕が正裏面に薄く見られる。

⑪煉瓦類（第18図）

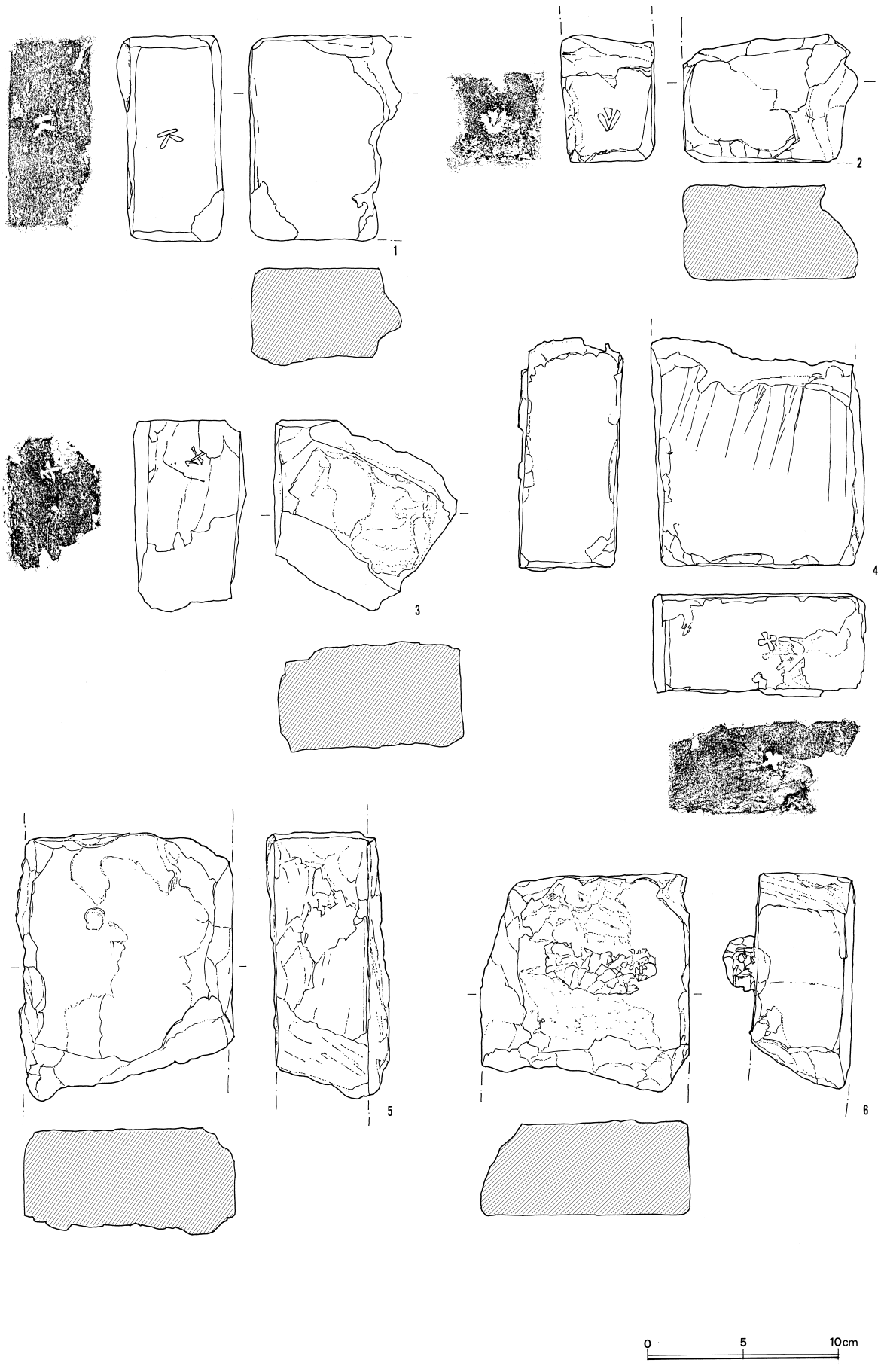
７は小口面幅4.5㎝を測り、色調は、赤黄褐色を呈する。正面に最大９㎜の厚さの天川が張付き、裏面は薄く天川の付着痕が見られる。８は小口面幅4.6㎝を測る。色調は赤褐色を呈し、正裏面共に天川が張付く。９は小口面幅4.6㎝で色調は、赤褐色を呈する。天川が全面に付着し、特に右側面と裏面は厚く張付く。10は小口面幅4.6㎝を測り、色調は黄赤褐色で焼成やや良。長軸の両端を欠損する。天川が正裏面、左右側面に薄く付着する。11は小口面幅5.1㎝で色調は暗黄赤褐色。右側面に煉瓦枠の木目が横長に付き、左側面は縦に木目が残る。天川の張付きは見られない。12は小口面幅が4.8㎝を測る。色調は赤褐色を呈する。正裏面に僅かに天川が張付く他は、風化により表面の整形が剥がれてザラついた状態にある。

⑫煉瓦類（第19図）

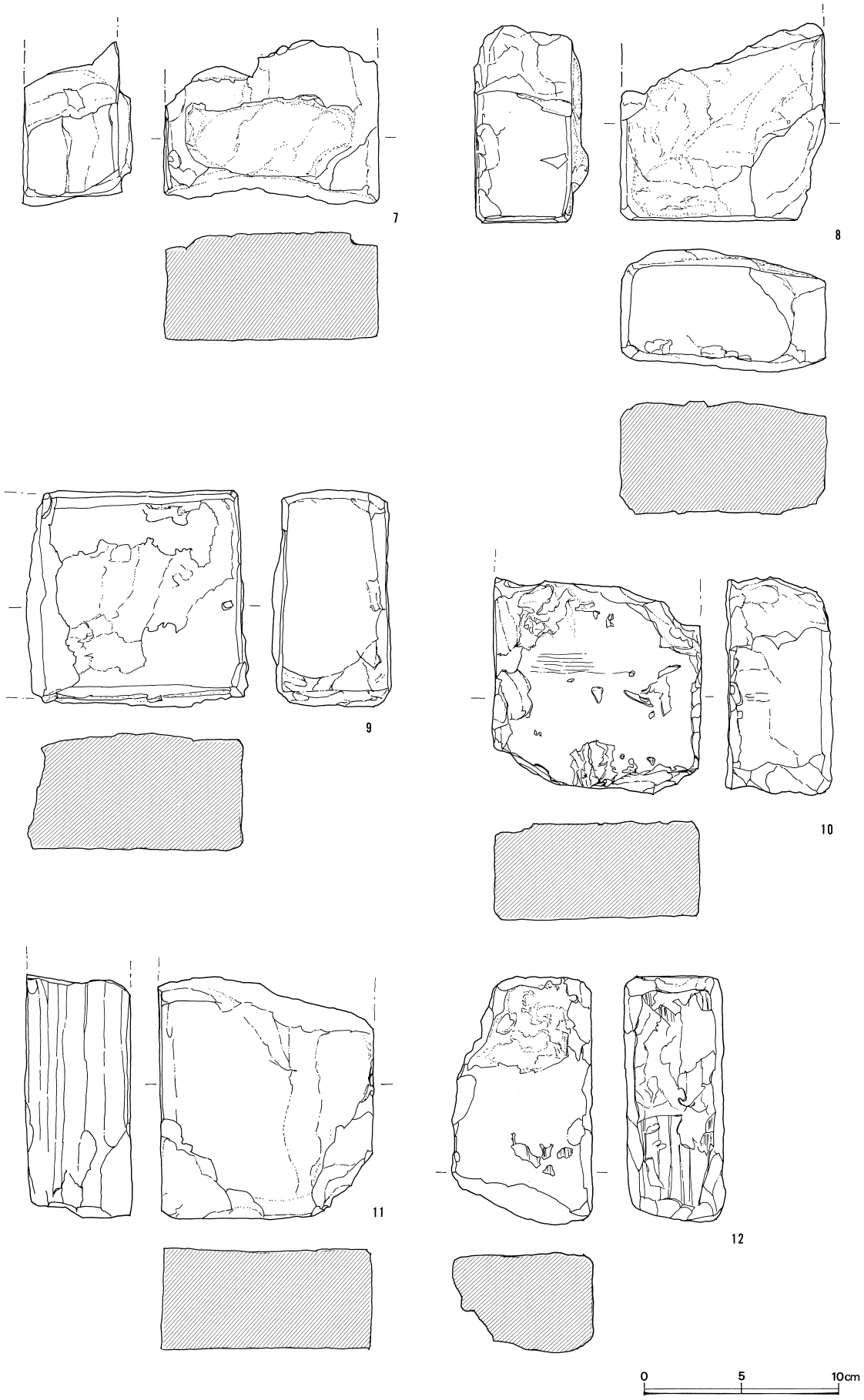
13は小口幅が2.2㎝で、色調は灰黒色を呈する。正裏面に煉瓦製作枠の木目模様が圧痕として付いている。小口面は、ナデ整形している。14は小口面幅2.5㎝で器面をナデ整形としている。色調は赤黄褐色を呈する。15は小口面幅が2.8㎝で色調は淡い黄褐色を呈する。天川の張付きが右側面に有る。16は小口面4.3㎝で色調は灰色で正裏面に木枠の木目圧痕が残る。また、裏面に天川が若干付着する。焼成は良好である。17は小口面幅4.3㎝の色調は、灰色を呈し焼成良好で器面のザラツキがない。天川の張付けはほとんどないが、裏面に付着痕が僅かに残る。正面には鉄錆が癒着する。18は小口面幅は3.3㎝。色調は灰色を呈し、正裏面に木枠の木目圧痕が残る。焼成良好。

⑬瓦類（第20図）

１は、頭の部分に丸面が取ってある面取桟瓦である。頭部分に菊花の刻印を押している。２も１と同じく頭に菊花の刻印が付く。３は片切平瓦（片切桟瓦）で左側に丸瓦を覆うために桟をなくした平



第17図　⑩煉瓦類（1区5層）



第18図　⑪煉瓦類（１区５層）

第19図　⑫煉瓦類（13～16は１区５層、17～18は３区５層、19は１区５層）

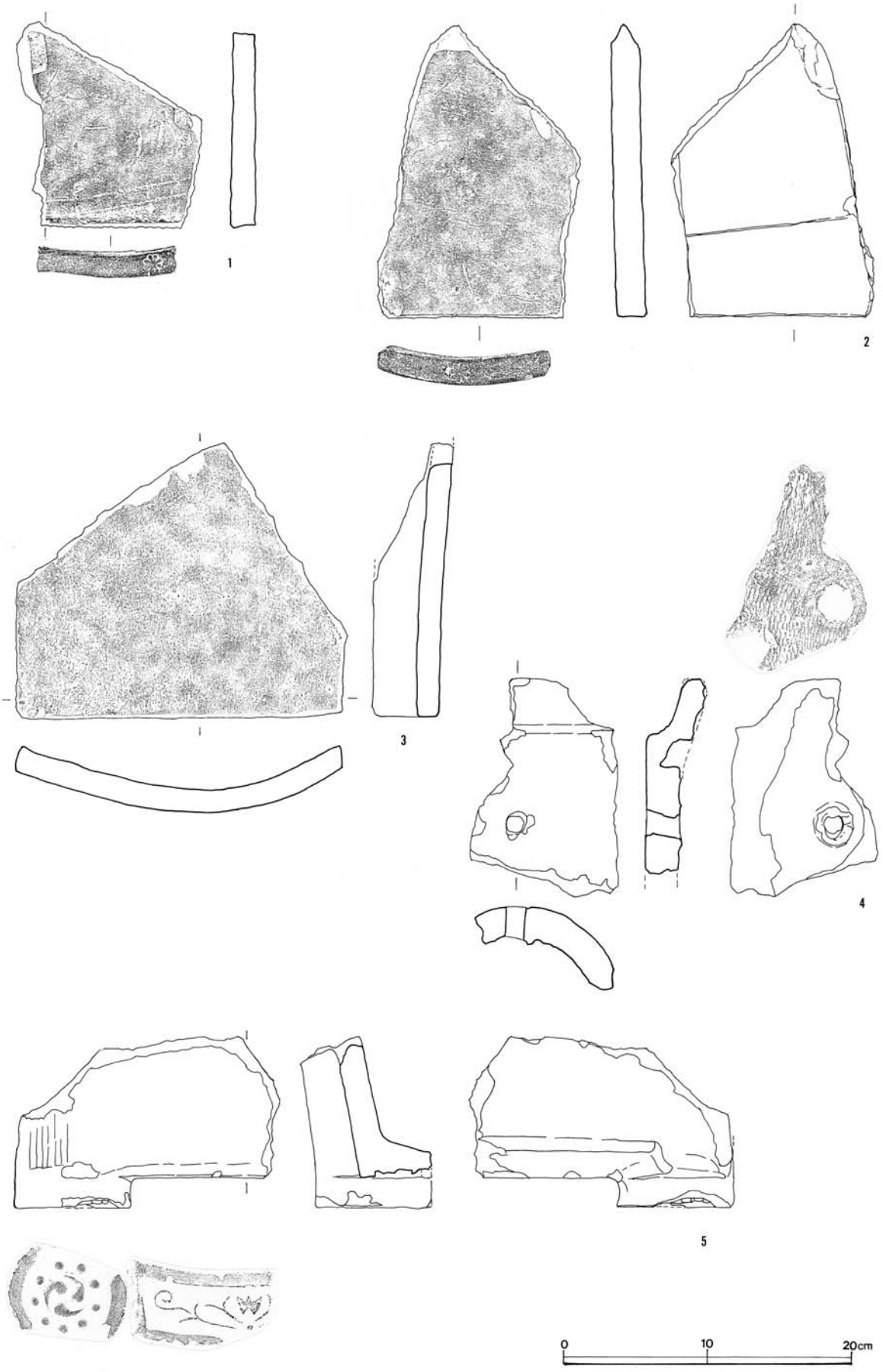
瓦である。４は丸瓦である。釘穴が凹面からの穿孔で開けられ、玉縁のある丸瓦である。玉縁の長さは38㎜を測り、内面には当て布の圧痕が残る。５は巴付唐草軒瓦である。小巴に巴文と連珠文９個を付け、垂れに唐草文様とコウモリ模様を付けた太剣（剣垂51㎜）軒瓦。

⑭ガラス類（第21図）

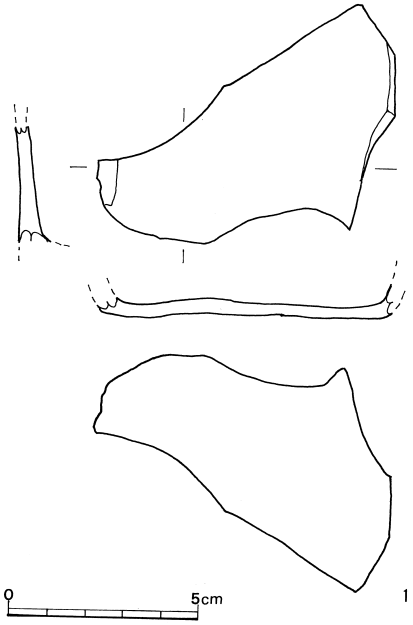
１はガラス製のジンボトル。モスグリーン色を呈し、表面は紫色と青色の光が反射する。

⑮クレーパイプ類（第22図）

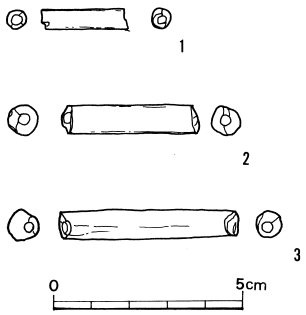
１は煙道穴の径0.2㎝。色調は白灰色で器面に磨きがかかり光沢をなす。２は煙道穴の径0.2㎝。色調は白赤色（ピンクがかった白色）で器面に磨きがかかり光沢をなす。３は煙道穴の径0.3㎝。色調



第20図　⑬瓦類（１～２は１区５層、３～５は１区５層）



第21図　⑭ガラス類（１区５層）



第22図　⑮クレーパイプ類
（１区５層）

は白黄色。器面の磨きはなくざらつく器面で小さな気泡が多く残る。

５．まとめ

１　遺構

・石組遺構

２区で確認した遺構で、長方形に加工した砂岩の石を東西方向に３個繋ぎあわせ、南側に砂岩の石を溝蓋石のように平行に設置している。石組を確認した土層は３層最下部にあたり、明治期の遺構と判断された。

・石垣遺構

出島の埋め立ては、幕末に３次に渡る工事が行われている。

第１次の埋め立ては、３．出島の埋め立て（１）に記載したように万延元年10月から始まり、文久元年（1861）７月に完成している。工事は水門の左側と右側の海面埋立て（225坪４合）及び荷揚場の地先に幅４間・長さ10間の築足をおこなっている。

第２次の元治元年（1864）７月には、波止の脇に「荷改所」（Custom House）を設置のため186坪と波止の先端に15坪６合の築足しを完成させている。

第３次は慶応３年（1867）３月から出島南側の「馬返し」を含む外国人遊歩道の埋立てが始まり、慶応３年６月に竣工している。

今回確認した石垣は、第２次埋立て時に築かれた部分と見られ、元治元年の石垣が想定される。

参考文献：『出島図』－その景観と変遷－「第３章　開国後の出島」著　中村質　長崎出島史跡整備審議会　長崎市1987．３

2　出土遺物について

・国内陶磁器

時代の特色として挙げられる資料としては、３層出土のコバルト型紙染付けの明治時代以降の所産である第８図１の碗がある。

第９図10は陶磁器の皿で、口縁端が反り区画内に花卉を描く。胎土は、暗白灰の精製した陶石使用。19世紀の資料。第９図11は、陶磁器皿で、見込みから内面体部にかけて花卉を描く。高台畳付は無釉である。高台内に１本の圏線を入れ体部と高台の堺に１本の圏線を入れ、体部は区画内に点を縦に並べ描いている。19世紀の所産。第９図12は、陶磁器皿で端反口縁としている。胎土は、白色の精製陶石を用いている。絵柄は自然風景と花卉を描く。第10図18は、陶磁器の蓋。高台畳付部分は無釉とし、この外は透明釉を掛ける。外面に樹木（松）を描き、内面に圏線が１本引かれているのが僅かに残る。19世紀代。第10図19は皿で、火を受けて文様が不明瞭となっている。コンニャク印判見込みとし、胎土は、ザックリした陶石で白色の色調を呈する。畳付は平坦としている。

参考文献；「九州陶磁の編年」－九州近世陶磁学会10周年記念－九州近世陶磁学会2002. 2 . 11
「肥前陶磁」ニュー・サイエンス社　著　大橋　康二　1989. 10. 5

・西洋陶器

19世紀のヨーロッパの窯業関係では、イギリスのスタッフォードシャーで陶器製作の材料が搬入され､ボーンチャイナを主要商品として生産していた｡1820年代までにコバルトブルーを釉としたブループリントのボーンチャイナが生産されている。オランダでは、18世紀末までに錫白釉ファイアンス陶器はなくなり、イギリス陶器製品の絵付けを行なうようになってくる。この時期に生産された資料が今回の出土品と言える。西洋陶器の第16図４が緑色で第16図５が黒色のプリント絵柄となっていて、このような色彩が持ちられる時期として1830～1846年代にかけてイギリスのスタッフォードシャーのアダムス窯においては、緑色、紫色、褐色、黒色、ピンク色が使用されていることから、出島にもたらされた時代として合致する部分である。

西洋陶器は、７点を掲載している。器種としては皿類、瓶類である。第16図２・３はイギリス製[註6]の染付楼閣山水文の絵柄で1810～1850年代の資料である。第16図７は絵柄の模様は染付中東風景図[註7]をプリントしたオリエンタルパタンーで、1855年～1870年代の遺物考えられる。また第16図６は薬瓶として用いられたアルバレロ型の白釉陶器である。

註６；『国指定史跡　出島和蘭商館跡』道路及びカピタン別荘跡発掘調査報告書「第１節出島・食卓の情景」－平成９・10年度の発掘におけるヨーロッパ陶器・ガラス器をめぐって－神戸市立博物館・学芸員　岡　泰正」170頁　長崎市教育委員会　2002

註７；『国指定史跡　出島和蘭商館跡』カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書第２分冊（考察編）「第１節出島出土のヨーロッパ陶器をめぐって」神戸市立博物館　主幹・学芸員　岡　泰正」35頁　長崎市教育委員会　2008

・煉瓦

長崎鎔鉄所建設のためハルデスはオランダの機関将校として耐火煉瓦の製作と指導を行なっている。出来上がった煉瓦を蒟蒻煉瓦又は、ハルデス煉瓦と呼んでいる。煉瓦の焼成地は、「飽の浦地区の岩瀬道の瓦窯で、安政４年（1857）12月」から始まり、実際の焼成は安政５年（1858）１月[註8]」から稼働している。

蒟蒻煉瓦の特色として厚さ50㎜以下の薄手の煉瓦で主に煉瓦の小口面に多くの種類の文様の刻印をしていることがあげられている。これに従い計測を行なったが、断面は天川の付着で正確な厚みを計測できないため小口面での計測を行なった。その結果第18図11の小口幅が51㎜で１㎜オーバするが、これ以外は50㎜以下で小口面に刻印を付けている。このことから、上限の安政５年（1858）以降に焼成された煉瓦と言える。

註８；『長崎大学教育学部紀要・教科教育学 vol. 41. p47－54：2003』「長崎地域における蒟蒻赤煉瓦にみる刻印の様相」富山哲之　長崎大学学術研究成果リポジトリ
『長崎大学教育学部紀要・教科教育学 vol. 40. p31－46：2003』「長崎地域における歴史的な蒟蒻赤煉瓦造建造物に関する研究」富山哲之　長崎大学学術研究成果リポジトリ

・瓦

面取桟瓦は、瓦の頭の部分に丸面が取ってあり桟瓦の総称としている。片切桟瓦は、左側に丸瓦を覆うため桟をなくした平瓦が出土している。丸瓦は本瓦葺の平瓦の間に被せて使うために作られたものであるあるが、棟の最上段にも使われる。桟瓦葺でも隣の瓦を継ぐ場合や棟の最上段にも使うことがある。また、棟瓦としてのみ使うものもある。巴付唐草軒瓦は小巴に連珠文９個が付き、太剣垂(垂れが5. 1㎜以上）に唐草模様と中央にコウモリ模様を付けた棟瓦。瓦の焼成は、何れも燻し銀のような色と独特のつやを持つ燻し瓦である。

参考文献；「図鑑瓦屋根」　著　坪井　利弘　理工学社　1994. 9 . 25
「日本の瓦屋根」著　坪井　利弘　理工学社　1996. 3 . 25

・ガラス製品

１区４層から出土した18～19世紀のオランダ製の角瓶のジンボトルの一片である。法量は高さ6. 4㎝、幅7. 8㎝、厚さは上部が0. 3㎝で下部に向かって0. 4㎝とわずかに肥厚する。色は暗緑黄色を呈しており、器壁には細かい気泡が多数入っている。上部を除き、隣接する３辺が内側へと湾曲していることから底部と直結する部位である。下部端にわずかに残る底部が中心から外側に向けて緩やかな弧を描くように曲がっていることから、底は平らではなく上底であり、推測できる底の直径は７㎝程度であると考えられる。ソーダガラス製で全面的に銀化が進んでいる。その他、ガラス製品は１区５層から板ガラス片３点と無色透明の不明品１点、３区４層から板ガラス片４点、３区５層から暗緑黄色のジンボトル片と同色のワインボトル片がそれぞれ１点ずつ出土している。いずれも、文久元年の築足の際に混入したものと思われる。

参考文献；由水常雄　1992『世界ガラス美術全集　第５巻　日本』求龍堂
永松　実　1993「発掘された食文化の洋風化について」『長崎出島の食文化』親和銀行

・クレーパイプ

クレーパイプのステム部の破片３点である。１の法量は、長さ23㎜、直径５㎜、煙管の直径は２㎜。胎土は白灰色で、器面は磨かれており光沢がある。クレーパイプの品質は、焼成前にめのうなどで研磨して陶器のような光沢のある表面に仕上げた上位品と、研磨をしない下位品とに大きく分けられる。さらに上位品はボウルのみ研磨を施した上級品と、ボウルとステムの両方に研磨を施した最上級品とに分けられ、本品はこの最上級品に該当する。２の法量は、長さ37㎜、直径８㎜、煙管の直径は２㎜である。胎土は乳白色であるが、埋土の影響で赤みを帯びている。器面は磨かれて光沢があり、１と

同じく最上級品の一部と思われる。３の法量は、長さ47㎜、直径８㎜、煙管の直径は３㎜で、煙管の位置は管の中心からずれて外側によっている。器面には磨きが無く粗い。パイプにレリーフやスタンプなどの紋様を施して磨きの行程を省いた、またはボウル部分のみを磨いた上級品であったか、最初から並製品以下として作られたことが考えられる。

参考文献；岩崎均史　2000「出島和蘭商館跡出土のクレイパイプについて」『国指定史跡出島和蘭商館跡西側建造物復元事業に伴う発掘調査報告書』長崎市教育委員会
Lingen, B（鈴木達也：翻訳・解説）2002「1998年・1999年の出島発掘作業による出土クレイ・パイプ調査報告」『国指定史跡出島和蘭商館跡道路及びカピタン別荘跡発掘調査報告書』長崎市教育委員会
Lingen, B（鈴木達也：翻訳・解説）2008「出島出土のクレイパイプについて」『国指定史跡出島和蘭商館跡カピタン部屋跡地西側建造物群発掘調査報告書第２分冊（考察編）』長崎市教育委員会

Ⅳ　立会調査

１．調査概要

調査は、長崎市江戸町の出来大工町・江戸町線の県庁第２別館から宮川医院まで、夜間に出島側の道路２車線約20ｍを通行止めにして発掘を実施した。立会調査範囲は、８ｍ×４ｍの32㎡とし、重機による掘削作業で遺構、遺物の目視確認作業を行なった。掘削作業をアスファルト道路面から深さ1.５ｍで周囲の壁面に土止め支保作業を行なう。1.5m以下に黄褐色粘土と角礫（30㎝前後）が堆積し、掘削深度が下がるごとに角礫が多くなり、黄褐色粘土が無くなってくる。遺物は、アスファルト面から約2.5mで明治時代以降の徳利の口縁部が１点出土したのみであった。約３ｍ掘削した時点で海水が上がってきて、約3.4mまで掘削を実施したが、石垣等の遺構及び遺物の検出は確認できなかった。

２．調査結果

立会調査の結果、工事区内については明治以降に海岸が埋め立てられたものと考えられ、江戸時代の出島和蘭商館跡に関する遺物や遺構については確認できなかった。よって、立会調査を実施した江戸町地区については、工事に支障ないと判断された。

煉瓦等計測表①

番号	形式	地区名	層位	長さ(残存)	幅(残存)	最大厚さ	重量(g)	特色
1	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	8cm	10.9cm	4.9cm	540	小口面幅4.3cm。色調は、暗赤褐色で正面、右側面、裏面に天川（白色を呈している）が張付く。小口面に「k」の刻印有り。
2	煉瓦	1区 DJM-1216-060	5層	9.2cm	6.7cm	5.0cm	360	小口面幅は4.45cm。色調は、淡赤茶褐色で天川が正裏面及び右側面に付着する。「V」字状の刻印有り。
3	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	10.0cm	9.7cm	5.0cm	420	小口面幅4.8cm。「千」の刻印文字有り。色調は、表面がやや焦茶色となるが胎土は明黄赤褐色を呈する。正裏面に天川が張付く。
4	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	12.25cm	11.3cm	5.6cm	840	小口面幅4.9cm。色調は赤褐色で焼成は、比較的良好である。天川（肌色を呈している）が裏面に張付く。「十」の刻印文字有り。
5	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	14.05cm	11.45cm	6.5cm	1,020	小口面幅は、4.8cm。色調は、明赤黄色（橙色）を呈し、天川が、正面、左側面、裏面に張付く。
6	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	10.4cm	11.1cm	5.0cm	760	小口面幅4.6cm。色調は赤褐色を呈する。鉄の癒着が正面にあり、天川の張付き痕が正裏面に薄く見られる。
7	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	8.5cm	11.2cm	5.0cm	460	小口面幅4.5cm。色調は、赤黄褐色を呈する。正面に最大9mmの厚さの天川が張付き、裏面は薄く天川の付着痕が見られる。
8	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	10.1cm	10.5cm	5.9cm	620	小口面幅4.6cm。色調は赤褐色を呈し、正裏面ともに天川が張付く。
9	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	11.5cm	11.0cm	6.0cm	980	小口面幅4.6cm。色調は赤褐色。天川が全面に付着し、特に右側面と裏面は厚く張付く。
10	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	11.2cm	10.7cm	5.6cm	660	小口面幅は、4.6cm。色調は黄赤褐色で焼成やや良。長軸の両端欠損する。天川が正裏面、左右側面に薄く付着する。
11	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	12.5cm	11.2cm	5.4cm	920	小口面幅5.1cm。色調は暗黄赤褐色。右側面に煉瓦枠の木目が横長に付き、左側面は縦に木目が残る。天川の張付きは見られない。
12	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	12.7cm	7.3cm	5.0cm	560	小口面幅4.8cm。色調は赤褐色を呈する。正裏面に僅かに天川が張付く他は風化により表面の整形が剥がれてザラついた
13	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	7.15cm	11.6cm	2.25cm	260	小口面幅は2.2cm。色調は灰黒色を呈する。正裏面に煉瓦枠の木目模様が圧痕として付いている。小口面は、ナデ整形している。
14	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	11.1cm	9.0cm	2.9cm	380	小口面幅2.5cm。ナデ成形で器面調整を行なっている。色調は、赤黄褐色を呈する。
15	煉瓦	1区 DJM-1216-056	5層	12.5cm	7.05cm	3.15cm	420	小口面幅は2.8cm。色調は淡い黄褐色を呈する。天川の張付きが右側面に有り。
16	煉瓦	1区 DJM-1216-057	5層	13.9cm	8.2cm	4.7cm	620	小口面4.3cm。色調は灰色で正裏面に木枠の木目圧痕が残る。また、裏面に天川が若干付着する。焼成良好。
17	煉瓦	3区 DJM-1216-061	5層	9.1cm	7.7cm	4.3cm	366.33	小口面幅4.3cm。色調は､灰色を呈し､焼成良好で器面のざらつきがない｡天川の張付きはほとんどないが､裏面に付着痕が僅かに残る。正面には鉄錆びが癒着する。
18	煉瓦	3区 DJM-1216-061	5層	7.9cm	6.9cm	3.35cm	240	小口面幅は3.3cm。色調は灰色を呈し、正裏面に木枠の木目圧痕が残る。焼成良好。
19	石炭	1区 DJM-1216-056	5層	4.9cm	4.0cm	4.0cm	47.93	

＊小口面；直方体や柱状・筒状のものの最も小さい面

瓦計測表②

番号	形式	地区名	層位	長さ(残存)	幅(残存)	厚さ	重量(g)	特色
1	桟瓦	1区 DJM-1216-056	5層	14.2cm	11.1cm	1.7cm		頭の部分に丸面が取ってある面取り桟敷瓦。頭部分に菊花の刻印有り。
2	平瓦	1区 DJM-1216-056	5層	14.1cm	20.4cm	2.0cm		頭部分に菊花の刻印有り。
3	平瓦	1区 DJM-1216-032	5層	19.0cm	23.2cm	1.6cm		片桟平瓦で左側に丸瓦を覆うため桟をなくして平瓦としている。
4	丸瓦	1区 DJM-1216-031	5層	15.1cm	10.3cm	2.3cm		玉縁の丸瓦で玉縁の長さ3.8cm。釘穴を有し、内面には、当て布の圧痕が残る。
5	桟瓦	1区 DJM-1216-030	5層	11.9cm	18.4cm	1.9cm		瓦当面の小丸に殊文9を配し、平部に蝙蝠と唐草文を描く。

クレーパイプ計測表③

番号	形式	地区名	層位	長さ(残存)	幅(残存)	厚さ	重量(g)	特色
1	クレーパイプ	1区 DJM-1216-057	5層	2.3cm	0.5cm(径)		0.9	煙道穴の径0.2cm。色調は白灰色で器面に磨きがかかり、光沢をなす。
2	クレーパイプ	1区 DJM-1216-057	5層	3.7cm	0.8cm(径)		2.8	煙道穴の径0.2cm。色調は白赤色（ピンクがかった白色）で器面に磨きがかかり、光沢をなす。
3	クレーパイプ	1区 DJM-1216-057	5層	4.7cm	0.8cm(径)		3.6	煙道穴の径0.3cm。色調は白黄色。器面の磨きはなくざらつく器面で小さな気泡が多く残る。

図　　版

①
出島和蘭商館跡調査区全景
（出島電停前の道路 2 車線調査）

②
1 区全景
（完掘状況）

③
出島和蘭商館跡立会調査
（横断歩道左覆鋼板設置部分立会）

本調査（①・②）・立会調査（③）

図版 2

2 区西壁土層断面

2 区石組遺構検出状況

2 区元治元年石垣検出状況

本調査（土層・石組・石垣）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	でじまおらんだしょうかんあと
書　　名	出島和蘭商館跡
副 書 名	一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第11集
編 著 者 名	町田利幸、前田加美
編 集 機 関	長崎県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地１　TEL0920-45-4080
発 行 年 月 日	西暦2014年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村及び遺跡台帳番号	コード 遺跡地図番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
出島和蘭商館跡	長崎市出島町	42201-109	93-25 94-25	32度44分38秒	120度52分18秒	2012.11.19～2012.12.7	22㎡	共同溝工事
	長崎市江戸町			32度44分42秒	129度52分19秒	2013.2.4～2013.2.7	32㎡	共同溝工事

収録遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出島和蘭商館跡	その他の遺跡（商館跡）	近世	石垣 石組	輸入陶器 近世陶磁器 煉瓦	元治元年の築足石垣及び埋め立てた土に混じり、出島で使用され廃棄されたと見られる輸入陶器や国産陶磁器等の出土品があった。

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第11集

出島和蘭商館跡

2014年３月14日

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂